兵庫県文化財調査報告　第368冊

篠　山　市

井ノ上森垣内ノ坪遺跡
宮ノ前向井遺跡
小中追谷口遺跡

－一般国道372号日置バイパス道路改築事業に伴う発掘調査報告書－

平成22(2010)年３月

兵庫県教育委員会

井ノ上森垣内ノ坪遺跡・宮ノ前向井遺跡・小中追谷口遺跡

兵庫県文化財調査報告　第368冊

兵庫県教育委員会

21教Ⓣ1－014 A4

篠 山 市

井ノ上森垣内ノ坪遺跡
宮ノ前向井遺跡
小中追谷口遺跡

－一般国道372号日置バイパス道路改築事業に伴う発掘調査報告書－

平成22(2010)年３月

兵庫県教育委員会

例　　言

1．本報告書は一般国道372号日置バイパス道路改築事業に伴い兵庫県丹波県民局　丹波土木事務所（旧篠山土木事務所）の委託を受けて平成14年度に発掘調査を実施した宮ノ前向井遺跡・井ノ上森垣内ノ坪遺跡・小中追谷口遺跡の発掘調査報告書である。

2．兵庫県教育委員会が発掘調査主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（当時、現兵庫県立考古博物館）の森内秀造と柏原正民・松岡千寿が発掘調査を担当した。

3．兵庫県立考古博物館における遺跡調査番号は下記の通りである。

宮ノ前向井遺跡	２００２０８３
井ノ上森垣内ノ坪遺跡	２００２０８４
小中追谷口遺跡	２００２０８５

4．遺跡の所在地は下記の通りである。

宮ノ前向井遺跡	篠山市宮ノ前字向井・字森ウ田
井ノ上森垣内ノ坪遺跡	篠山市井ノ上字森垣内ノ坪・上宿字屋敷ノ坪
小中追谷口遺跡	篠山市小中字追谷口

5．遺物番号の表示は本文・図版・図面を通して統一した。

6．本報告書については、森内が執筆・編集し、編集については非常勤嘱託員　岡田美穂の協力を得て行った。また、青木哲哉氏には地形分析について玉稿をいただいた。

7．遺構写真は調査担当者の撮影によるもので、航空写真は写測エンジニアリング株式会社に撮影委託したものである。また、遺物写真については、谷口フォトに撮影委託した。

8．図示した方位はすべて座標北を示し、水準はTPを使用した。国土座標系は第Ⅴ系を使用している。

9．整理後の遺物については、兵庫県立考古博物館ならびに同博物館魚住分館に保管している。

10．調査および報告書の作成にあたっては、下記の方々のご指導とご教示を仰いだ。記して感謝の意を表するものである。（敬称略）

青木　哲哉（立命館大学）・成田　雅俊（篠山市教育委員会）

本文目次

第１章　調査の経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経過
　第２節　確認調査の実施
　第３節　本発掘調査の経過
　第４節　整理作業

第２章　遺跡の歴史・地理的環境 …… 5
　第１節　地理的・歴史的環境
　第２節　調査地周辺の遺跡

第３章　井ノ上森垣内ノ坪遺跡 …… 7
　第１節　遺跡の立地と遺構
　第２節　出土遺物
　第３節　小結

第４章　宮ノ前向井遺跡 …… 19
　第１節　遺跡の立地と遺構
　第２節　出土遺物
　第３節　小結

第５章　小中追谷口遺跡 …… 25
　第１節　遺跡の立地と遺構
　第２節　出土遺物
　第３節　小結

第６章　自然科学分析 …… 33
　Ⅰ　小中追谷口遺跡、宮ノ前向井遺跡および井ノ上森垣内ノ坪遺跡の地形環境
　　青木　哲哉（立命館大学非常勤講師）
　Ⅱ　宮ノ前向井遺跡から出土した木材・種実遺体の年代
　　パリノ・サーヴェイ株式会社

報告書抄録 …… 48

写真図版目次

図版１　a　遺跡群遠景（西から）　b　遺跡群遠景（北西から）
図版２　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区　全景（俯瞰）
図版３　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区　a　全景（西から）　b　全景（東から）
図版４　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区　a　SK01土器出土状況（東から）
b　SK02土器出土状況（西から）
図版５　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区　a　SB01 a・b（西から）　b　SB02（南から）
c　SB02（東から）
図版６　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区　SB01 a・b柱穴断ち割り断面１
図版７　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区　SB01 a・b柱穴断ち割り断面２
SB03柱穴断ち割り断面
図版８　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区　SB02柱穴断ち割り断面
図版９　宮ノ前向井遺跡　a　SX01・02（南から）　b　SX01（南から）　c　SX02（南から）
図版10　小中追谷口遺跡　全景（俯瞰）
図版11　小中追谷口遺跡　a　全景（西から）　b　全景（東から）
図版12　小中追谷口遺跡　a　SB01（北から）　b　SB01（西から）
図版13　小中追谷口遺跡　SB01柱穴断ち割り断面
図版14　井ノ上森垣内ノ坪遺跡出土遺物
図版15　宮ノ前向井遺跡出土遺物
図版16　小中追谷口遺跡出土遺物

挿図目次

第１図　確認調査トレンチ配置図
第２図　日置バイパス本発掘調査遺跡位置図
第３図　篠山市の位置と遺跡の位置
第４図　周辺の遺跡分布図
第５図　井ノ上森垣内ノ坪遺跡調査区配置図
第６図　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区全体図
第７図　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区SB01
第８図　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区SB02
第９図　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区SB03・SB04
第10図　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区SK01・SK02
第11図　井ノ上森垣内ノ坪遺跡出土遺物１
第12図　井ノ上森垣内ノ坪遺跡出土遺物２
第13図　宮ノ前向井遺跡調査区配置図
第14図　宮ノ前向井遺跡Ⅰ区全体図
第15図　宮ノ前向井遺跡Ⅱ区全体図
第16図　宮ノ前向井遺跡出土遺物
第17図　小中追谷口遺跡調査区配置図
第18図　小中追谷口遺跡全体図
第19図　小中追谷口遺跡SB01
第20図　小中追谷口遺跡出土遺物１
第21図　小中追谷口遺跡出土遺物２
第22図　調査区周辺の地形分類図
第23図　小中追谷口遺跡における遺構検出面からのトレンチ断面図
第24図　宮ノ前向井遺跡Ⅰ区における遺構検出面からのトレンチ断面図
第25図　宮ノ前向井遺跡Ⅱ区における遺構検出面からのトレンチ断面図
第26図　宮ノ前向井遺跡Ⅲ区における遺構検出面からのトレンチ断面図
第27図　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅰ区における遺構検出面からのトレンチ断面図
第28図　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区における遺構検出面からのトレンチ断面図

表目次

第１表　井ノ上森垣内ノ坪遺跡出土遺物一覧表
第２表　宮ノ前向井遺跡出土遺物一覧表
第３表　小中追谷口遺跡出土遺物一覧表
第４表　放射性炭素年代測定および暦年較正結果

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経過

国道372号は兵庫県姫路市から加西市・加東市・篠山市を経て京都府亀岡市に至る延長約102kmの一般国道である。昭和49年に一般国道372号の指定交付を受けた。京都市と姫路市を最短で結ぶ道路で、途中、国道９号・京都縦貫道路・舞鶴若狭自動車道路・国道176号・同175号・中国自動車道・山陽自動車道・播但連絡道・国道２号に接続する幹線道路である。ことに阪神・淡路震災時には京阪神の道路軸の代替路線として大きな役割を果たした。その後、高速道路網の整備とともに震災時の代替路線としての認知度の高まりにより、流通トラックの通行量が年々増加する傾向にあった。しかしながら、372号は線形不良や幅員の狭小区間が多いことが問題となり、その解消のために各地の該当区間で道路改良工事が進められてきた。日置バイパスの建設もその１つで、車道幅員が狭小なうえ、歩道と車道の区別がなく、歩行者の安全と円滑な交通の確保が地域住民から求められていた。この要望を受けて県土整備部篠山土木事務所は、改善案を検討し、いくつかの案の中から集落の南に迂回するバイパス案を選択した。

この決定を受けて、兵庫県教育委員会は、日置バイパス道路改築事業に伴う埋蔵文化財調査の取り扱いについて、兵庫県柏原土木事務所（当時）との協議を行い、事前に事業地内の遺跡の分布調査を行うこととした。分布調査は平成12年10月４日に行い、この結果に基づき、平成13年度に同市井ノ上から小中に至る延長約1.3km区間の確認調査を実施することになった。

第２節　確認調査の実施

確認調査は平成13年３月14日付、柏土第2259号により実施した。なお、平成13年４月１日の組織改組により、事業主体者は兵庫県柏原土木事務所から兵庫県丹波県民局県土整備部篠山土木事務所に変更されている。

確認調査の実施にあたっては、調査対象地内に10m×２mを基本とする51本の調査トレンチを設定し、さらに遺構および遺物包含層が認められたトレンチ周辺には新たに合わせて12本の調査トレンチを設けて、本発掘調査の範囲確定を行った。

この結果、２～５・54トレンチ（上宿字屋敷ノ坪・井ノ上森垣内ノ坪）、18・22・23・26トレンチ（宮ノ前字森ウ田・字向井）、50・51トレンチ（小中字追谷口）において遺構が確認されたことにより、この３地区を対象とした本発掘調査を実施することとなった。

調査主体：兵庫県教育委員会

遺跡調査番号：２００１００８・２００１１３６

調査担当者：兵庫県教育委員会　埋蔵文化財調査事務所（当時）

調査第１班　主査　別府　洋二　　鈴木　敬二

調査期間：平成13年６月１日～７月26日

第３節　本発掘調査の経過

第２節において述べた通り、平成13年度の確認調査において、上宿～井ノ上・宮ノ前・小中の３地区で遺構が所在することが判明した。今回の本発掘調査はこの確認調査成果を受けて、平成14年３月12日付丹波（柏土）第2614号による兵庫県丹波県民局長からの依頼により兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した。

なお、各遺跡名については大字に小字を附加して遺跡名を与えた。このうち、井ノ上森垣内ノ坪遺跡については、上宿字屋敷ノ坪から井ノ上字森垣内ノ坪にまたがるが、遺構の大半が井ノ上の地に集中しているので、井ノ上森垣内ノ坪の遺跡名を与えた。また、同遺跡については、当初、井ノ上屋敷ノ坪遺跡の遺跡名を与えていたが、屋敷ノ坪は上宿の小字名であり、井ノ上屋敷ノ坪遺跡とすると屋敷ノ坪が井ノ上の小字であるかのような誤解を与える恐れがあるので、当初の遺跡名を改め井ノ上森垣内ノ坪遺跡を正式な遺跡名とする。

調査期間：平成14年５月21日～平成14年８月６日

調査面積：井ノ上森垣内ノ坪遺跡　1,531㎡

宮ノ前向井遺跡　2,000㎡

小中追谷口　950㎡

調査担当：主査　森内　秀造　　同　柏原　正民　　同　松岡　千寿

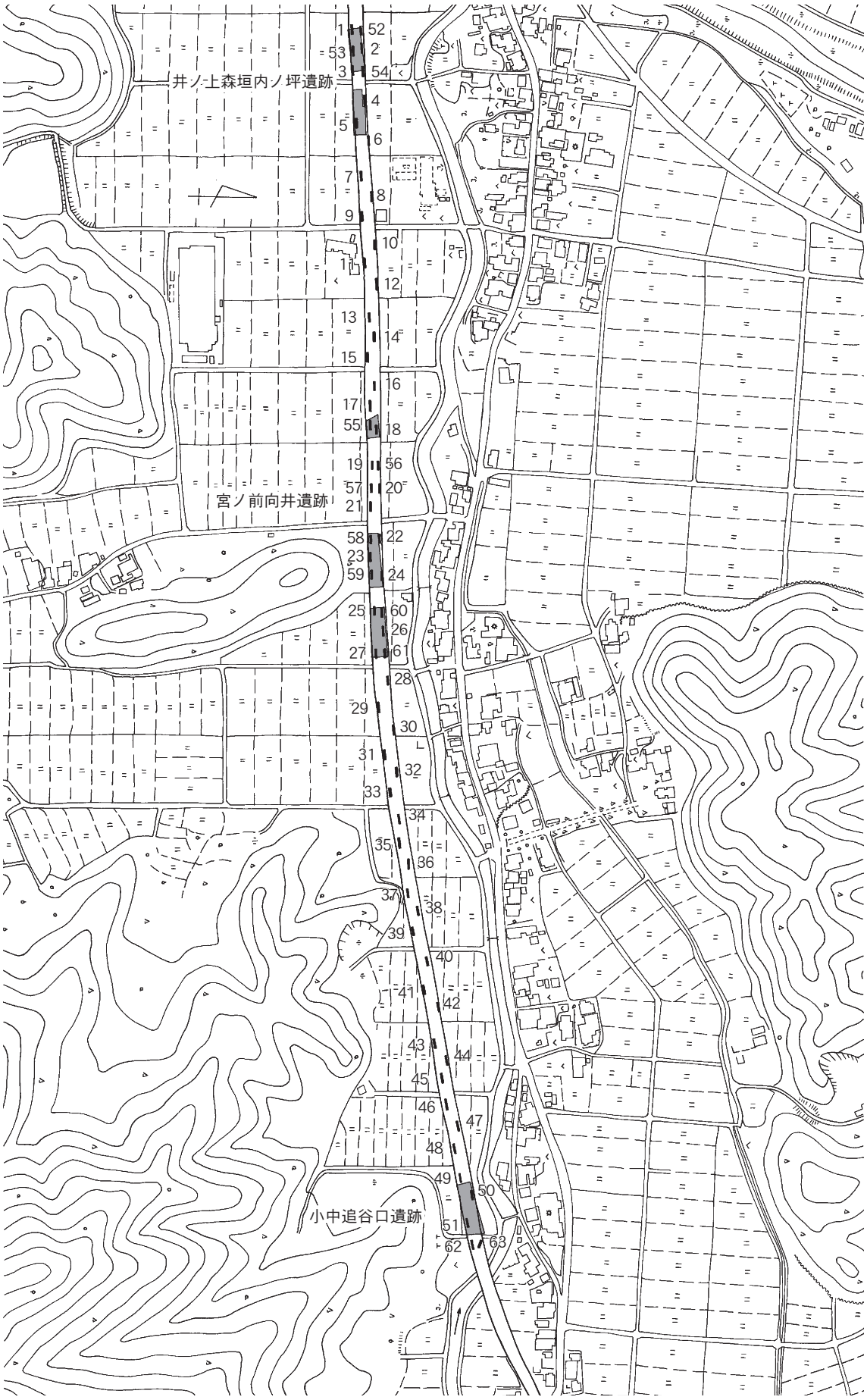
調査補助員：西本　寿子

第４節　整理作業

平成21年度に水洗いからトレース・レイアウトの諸作業を行ない、報告書の刊行を行なった。

接合・復元作業：西口　由紀

実測作業～レイアウト作業：岡田　美穂



第１図　確認調査トレンチ配置図（１：6,000）

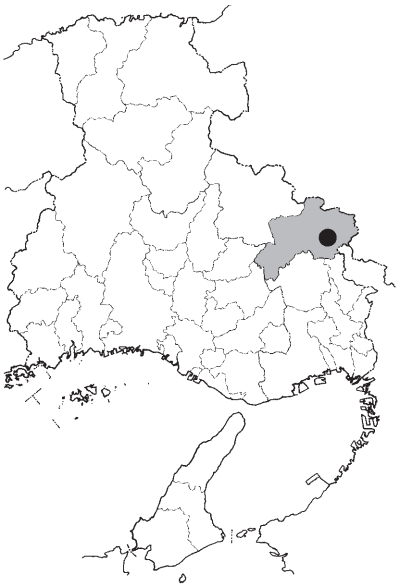
第２図　日置バイパス本発掘調査遺跡位置図（１：8,000）

第２章　遺跡の歴史・地理的環境

第１節　地理的・歴史的環境

遺跡が所在する篠山市は兵庫県の中東部にあり、京都府と府県境を接する。かつては多紀郡に属し、平成11年に多紀郡篠山町・今田町・西紀町・丹南町の４町が合併し、市制が敷かれた。市制の施行は平成の大合併のさきがけとなったことで注目を集めた。この合併によって、旧多紀郡全域が篠山市となり、多紀郡の名称が消滅した。

市内では昭和50年代以降の圃場整備に伴う調査によって縄文時代から弥生・古墳時代にかけての遺跡が数多く発見されている。市内の代表的な遺跡として、まず県内で第２位の大きさを誇る前方後円墳の雲部車塚古墳があげられる。歴史時代の遺跡としては寺内廃寺や竜円寺などの廃寺跡のほか、多紀郡衙跡と推定される東浜谷遺跡があり、「郡」の刻印のある須恵器が出土している。また、旧丹南町域は著名な東寺領丹波大山荘の所在地、旧今田町域は丹波焼の生産地としてとして知られている。中近世になると、多紀郡を支配した波多野氏の居城八上城を中心として多くの城が築かれているが、八上城は篠山城の築城に伴い廃された。以後は篠山城を中心に栄え明治に至っている。



第３図　篠山市の位置と遺跡の位置（１：800,000）

第２節　調査地周辺の遺跡

今回調査を実施した篠山市井ノ上～小中は篠山市の東端にある。約７km東の天引峠を越えれば、京都府に至り、兵庫丹波の最東の地に位置する。地形・地理的にみると北東方向から流下する篠山川、南の三田市との境付近に源を発する曽地川、東から流下する辻川の３川の合流点付近を望む地にある。

周辺の遺跡として知られているのは、辻川沿いの南側の丘陵麓にふの木山１号・２号墳、畑市西ヶ辻古墳群、大仙寺古墳、篠山川の両岸に岨谷東古墳群、北嶋古墳群、北嶋スガ谷古墳群があり、いずれも円墳であるが、時期その他については明らかではない。なお、宝地山２号墳からは七鈴鏡が出土している。

周辺の集落遺跡については、これまで発掘調査がほとんど行われていないので、ほとんど実態が明らかではなかったが、今回の調査によって、縄文時代晩期～弥生時代前期、飛鳥時代から平安時代、さらに鎌倉時代の遺跡の存在が初めて明らかになったことになる。

参考文献

篠山町教育委員会『古代祖先のあゆみ』　1980年

池田 正男「何人カノ筆に成る雲部車塚古墳」『兵庫県埋蔵文化財紀要』第２号 兵庫県教育員会埋蔵文化財調査事務所　2002年

1	井ノ上森垣内ノ坪遺跡	10	堂山古墳	19	ふの木山１号墳	28	栃梨城跡
2	宮ノ前向井遺跡	11	岨谷東古墳群	20	ふの木山２号墳	29	極楽寺跡
3	小中追谷口遺跡	12	畑市西ヶ辻古墳群	21	角田ノ坪１号墳	30	井上城跡
4	細工所遺跡	13	宝地山古墳群	22	角田ノ坪２号墳	31	平内丸
5	雲部車塚古墳	14	北嶋スガ谷古墳群	23	大仙寺古墳	32	赤穂谷中世墳群
6	姫塚古墳	15	北嶋古墳群	24	南山城	33	畑市城跡
7	洞光寺古墳	16	梨木谷古墳群	25	安養寺跡	34	井上館跡
8	金比羅山古墳	17	鉄砲山遺跡	26	東山城跡	35	御所が谷窯跡
9	坂の谷古墳	18	御所が谷古墳群	27	淀山城跡	36	磯の宮八幡神社

第４図　周辺の遺跡分布図（１：25,000）

第３章　井ノ上森垣内ノ坪遺跡

第１節　遺跡の立地と遺構

辻川と篠山川の合流点付近に位置し、今回、本発掘調査を実施した３遺跡のうちで最も西に所在する。第６章の青木哲哉氏の地形分析にあるように、当該遺跡の地形は南側の山地を刻む辻川支流が形成した小規模性扇状地が段丘化したもので、北西方向にゆるやかに傾斜している。

調査区は総延長約120mあるが、中央部の農道を境に調査区を２つに分け、西側をⅠ区、東側をⅡ区とした。Ⅰ区、Ⅱ区ともに発掘調査着手前の地目は水田で、以前に行われた圃場整備により、両区水田の間には約１mの段差ができている。

Ⅰ区

当該地の本来の地形は、東から西に向かっての緩やかな傾斜面であったが、圃場整備によって本来の斜面地形が失われ、東西に長い１枚の水田となっている。このため、東側区域は掘り下げによって遺物包含層および遺構面が失われ、遺構は壁際で検出された中世の土坑（SK01）のみで、これ以外に明確な遺構はない。但し、Ⅱ区西端の遺構の希薄性からみて、Ⅰ区東側にそれほど多くの遺構が存在したとは思われない。

発見された遺構のSK01は、直径1.35m、深さ0.4mの土坑で、内部から瓦器皿・椀（*101*～*103*）が出土している。

Ⅱ区

包含層は圃場整備時の削平を受けて存在せず、遺構検出面も地盤改良剤による硬化の影響を受けて、遺構の検出は容易ではなく、硬化の及んでいない深度まで掘り下げて検出をせざるをえなかった。従って、本来の遺構面をやや掘り下げての検出であり、本来の検出高は実際の検出面よりも高い位置にある。なお、調査北東部については、地山面が削平され、遺構が残存していない。

SB01

調査区の西端で発見された建物跡である。方位を同じくする２棟の建物からなるが、柱穴の切り合い等から２つの建物は同時に存在したものではなく、１棟は建て替えに伴うものと判断し、建て替え前の建物をSB01a、建て替え後の建物をSB01bとした。01aと01bは、ともに柱穴の掘り方の径は0.3m前後で、柱穴掘り方からの出土遺物はいずれも土師器の細片と須恵器片のみで、時期を特定できるものはなかったが、鎌倉前半期の瓦器片は全く含まれておらず、建物の建築年代は鎌倉前半期以前の時期と考えてよい。但し、調査地区内での遺構や遺物包含層からは７世紀後半を遡る年代の遺物は出土していないので、構築年代は７世紀後半を上限とする。

SB01a

SP13～SP18の柱穴群で構成される南北１間、東西２間の建物跡である。柱間は南北の梁行きが3.1m、東西の桁行きについては、北側のSP16-SP17とSP17-SP18の柱間が2.2mであるのに対して、南側のSP15-SP14とSP14～SP13の柱間は2.0mと2.4mである。これはSP14の位置が東に0.2mずれていることによる。

SB01b

SB01aの建物跡に平行して建てられた建物跡である。北側の桁柱のうち、SP08～SP10の各柱穴がSB01a

の南側桁柱（SP13〜SP15）の各柱穴を切っていることから、SB01bがSB01aよりも後の時期に建てられた建物であることがわかる。東と西に庇をもつ。庇は１間×２間で梁行1.3m、桁行1.4mである。母屋部は南北１間、東西２間の規模である。柱間は南北の梁行きが3.1mであるのに対して、東西の桁行きは、北側のSP04-SP03、SP08-SP09の柱間が1.9m、南側のSP03-SP02、SP09-SP10の柱間は2.4mである。この1.9mと2.4mという不等間隔は旧棟のSB01a南桁行きの柱間の不等間隔に起因する。すなわち、建て替え時にSB01aの南側桁行を軸にして建物を南側に折り返すように建てたために、SB01aの柱間隔がそのままSB01bの柱間隔に採用されている。従って、建て替え後のSB01bは西と東に庇の部分が追加されただけで母屋の大きさは全く同じである。

SB02

Ⅱ区の中央部に位置する総柱建物で、隣接するSB03とは、建物主軸を同じくする。２間×２間の正方形の建物で、柱間は1.8m前後、柱穴の掘り方は円形で径は0.5〜0.6m、検出面からの深さは0.35m前後である。柱穴掘り方からの出土遺物はいずれも土師器の細片と須恵器片のみで、時期を特定できるものはなかったが、鎌倉前半期の瓦器片は全く含まれていない。

SB03

SB02の北側に位置する２間以上の建物で、規模は4.15m以上、北東側はさらに調査区外に伸びる。柱間は1.8m、柱穴の掘り方は円形で径は0.5〜0.6m、検出面からの深さは0.35mである。SB02と方位を同じくし、建物規模もほとんど同じである。柱穴掘り方からの出土遺物はいずれも土師器の細片と須恵器片のみで、時期を特定できるものはなかったが、鎌倉前半期の瓦器片は全く含まれていない。

SB04

直線上に並ぶSP31〜SP34を北側の桁行柱列と考え、建物跡SB04とした。柱間はSP31-SP32、SP32-SP33が2.4m、SP33-SP34が3.0mである。前２者と後者の柱間が異なるので、SP31が果たしてSB04の柱穴であるかは想定される南側の柱列が調査区外にあるので結論は出せないが、一応３間の建物と想定しておく。なお、SP31-SP32、SP32〜SP33の2.4mはSB01の柱間と同じである。SB01とは方位も同じくしているので、同一時期の建物の可能性が高い。

SD01

幅１m前後、深さ0.45m前後の小溝で、南東方向から北西方向に延びる。埋没後にSK01が掘り込まれている。溝内から内面にかえりをもつ須恵器の蓋（*104*）が出土しており、７世紀後半代の人為的に設けられた溝の可能性が高い。

SK01

SD01の埋没後に穿たれた深さ0.45mのピットである。上層面に土師器壺*105*が口縁部を逆にした状態で検出されたが、土師器壺の底部は遺構面の削平の際に削り取られて残存しない。

SK02

径0.52m、深さ0.25mの土坑である。土師器甕*106*が口縁部を上にした状態で検出されたが、底部を欠くので意識的に埋置されたかどうかは不明である。

第２節　出土遺物

Ⅰ区出土遺物

SK01

出土遺物はいずれも瓦器である。*101*は口径8.0cmの瓦器小皿である。口縁の一部を欠くが、ほぼ完形品である。手づくねによる成形で、底部外面に指による押圧の痕が残る。内面は全体に磨きが施されているが、外面は口縁部周縁のみに調整ならびに磨きが施されている。*102*は口径13.5cmの椀の破片で底部を欠く。口縁部はわずかに内側に傾けられ、端部はやや尖り気味に仕上げる。外面は吸炭面の多くの部分が剥落し残存状態が悪い。*103*は口径13.3cm、器高4.8cmの椀である。底部に高さ0.8cm、幅1.2cmの外側に踏ん張る低い貼り付け高台がつく。口縁部は内側にわずかに屈曲し、端部は丸く納める。体部内面は横方向の磨きの痕がよく残り、底部内面はジグザグ状の直線文の磨き痕が観察される。口縁部外面は端部および周縁部を板状工具で磨きを含めた調整を行っている。体部は成形時の押圧痕のみである。

Ⅱ区

SD01

かえりのある須恵器蓋の小片（*104*）が１片出土している。

SK01・SK02

*105*は口径21.7cmの土師器甕である。体部下半を欠く。くの字形の外反する口縁部をもつ。*106*はSK02出土の土師器甕である。左右に取手が付くが、一方を欠く。取っ手は体部に対して水平ではなく斜めに取り付けられている。口径22.1cm。底部を欠く。体部外面は垂直に近い斜め方向のハケ目、内面は口縁から頸部にかけて横方向のハケ調整を行う。

ピット30

須恵器（*107*・*108*）、白磁（*109*）、瓦器（*110*）が出土している。須恵器蓋*107*は大きくひずむ。平らな天井部からわずかに屈曲し外側に開く口縁部をもつ。天井部はヘラ切り後、軽いナデ調整を施す。*108*は須恵器の皿である。還元が不十分で、硬質の土師器のような質感を呈する。体部内外面は横ナデ調整、底部外面はヘラ切り後、軽いナデ調整を施す。瓦器椀*110*は体部は直線的に立ち上がり、底部には貼り付け高台が施されている。内外面とも吸炭黒化されているが、表面の摩滅著しく、磨き等の痕跡は失われている。

白磁碗*109*は口縁部破片で、口縁端部は楕円形状に小さく肥厚する玉縁状に形状を呈する。大宰府編年Ⅱ類にあたる。

ピット18・20・29

111・*112*はともに土師器甕で、口縁部がくの字状に外反する。表面は摩滅し、調整は不明である。砂粒多く含む。*113*は瓦器の椀底部片である。内外面とも吸炭黒化されているが、表面の摩滅著しく、磨き等の痕跡は失われている。

包含層

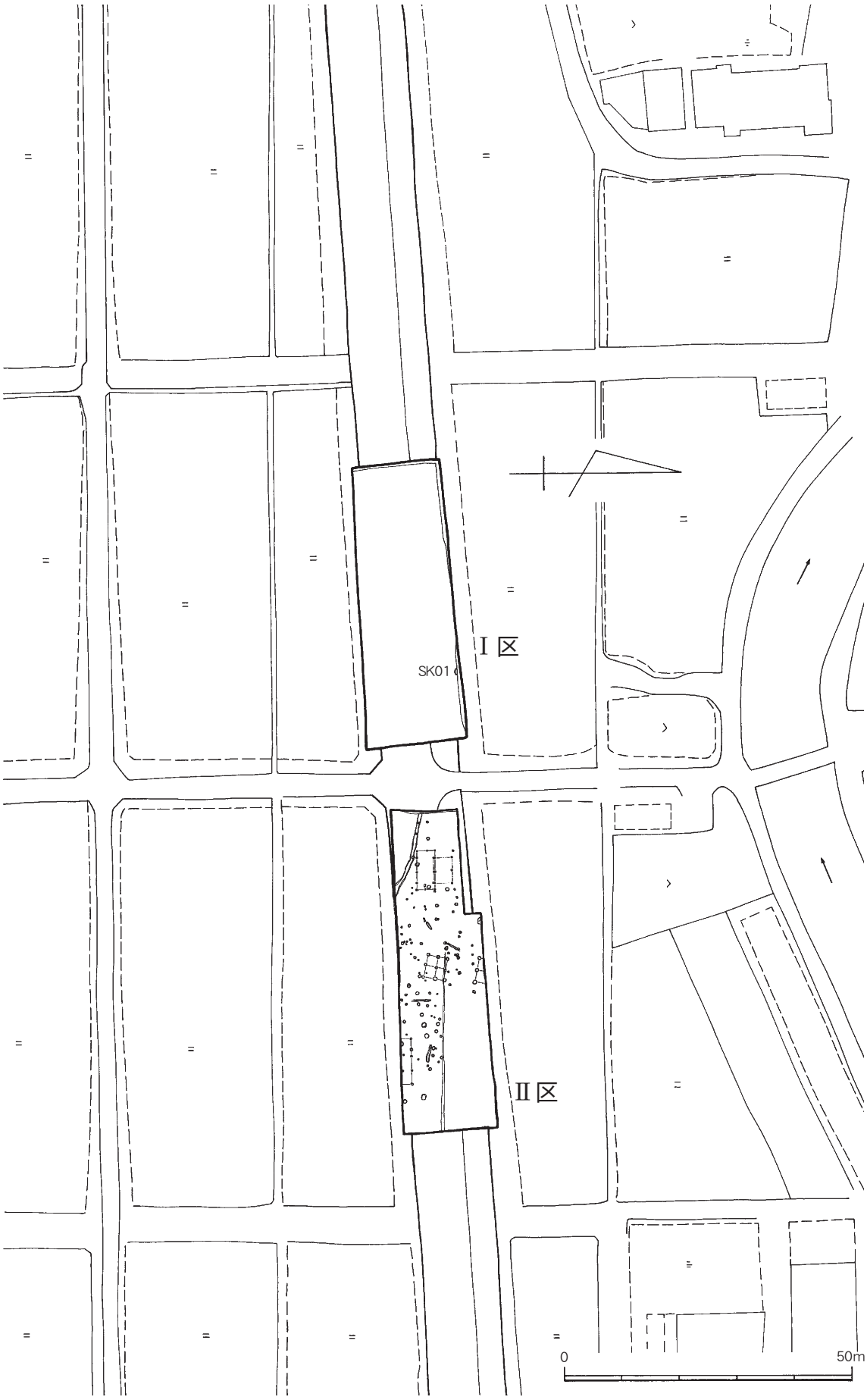
*114*はかえりのある須恵器蓋の小片で、口縁部は天井部からわずかに屈曲して続く。*115*は須恵器の杯Aの破片で、体部と底部の境付近から底部全体にヘラ削り調整を施す。*116*は須恵器甕の頸部片である。

第３節　小結

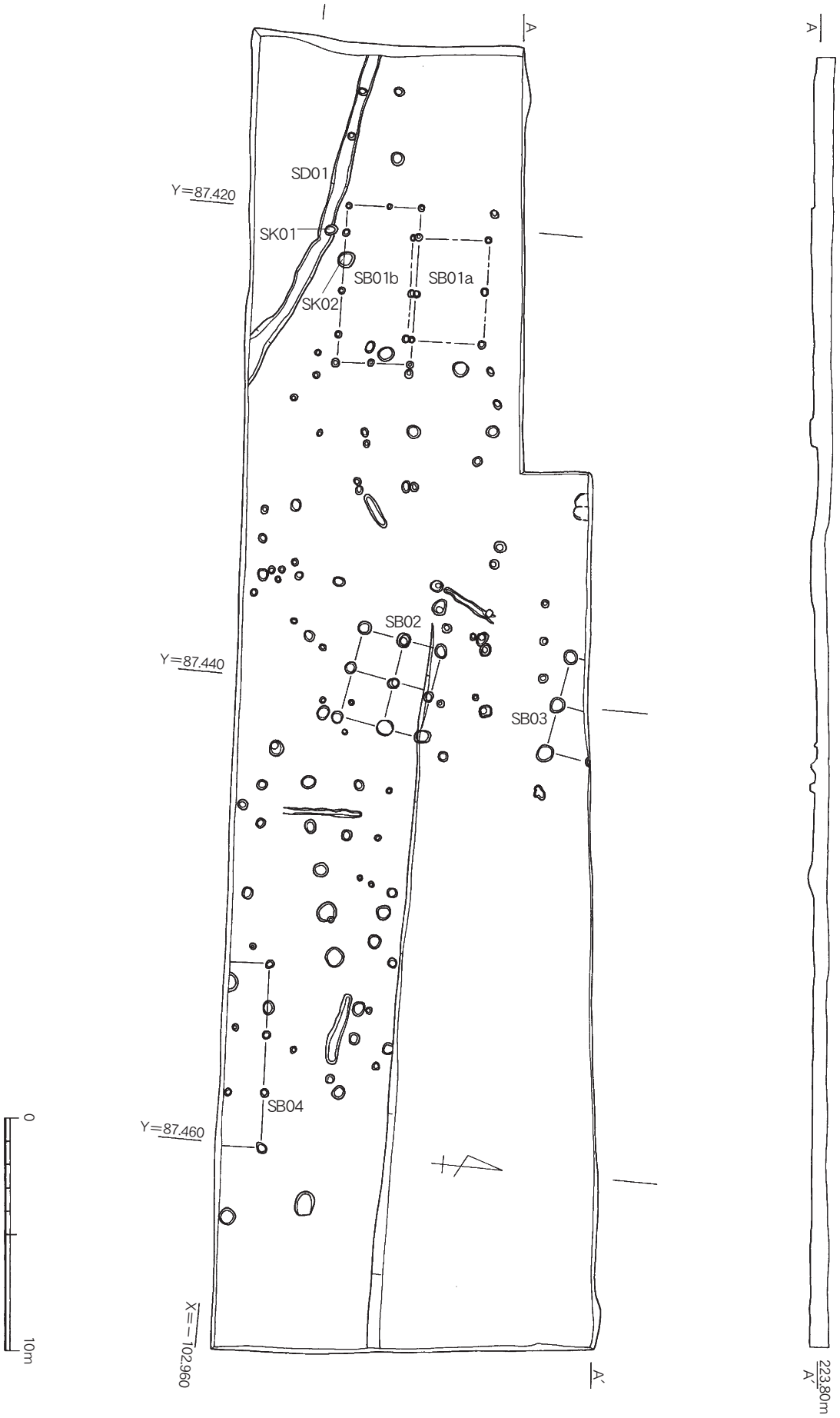
Ⅱ区では比較的平坦な面が広がるが、Ⅱ区西端からⅠ区へはゆるやかに傾斜し、Ⅰ区西側では湿地となる。

こうした遺跡の立地条件からⅡ区では掘立柱建物群を中心とした遺構群が分布するのに対して、Ⅰ区での遺構の分布は希薄である。Ⅱ区においては、掘立柱建物４棟を中心とした遺構群を検出したが、建物群の一部は調査区内ではおさまらず、調査区外に延びる。遺構の分布状況から判断して建物群は当該地区の南側と北側に展開しているものと思われる。

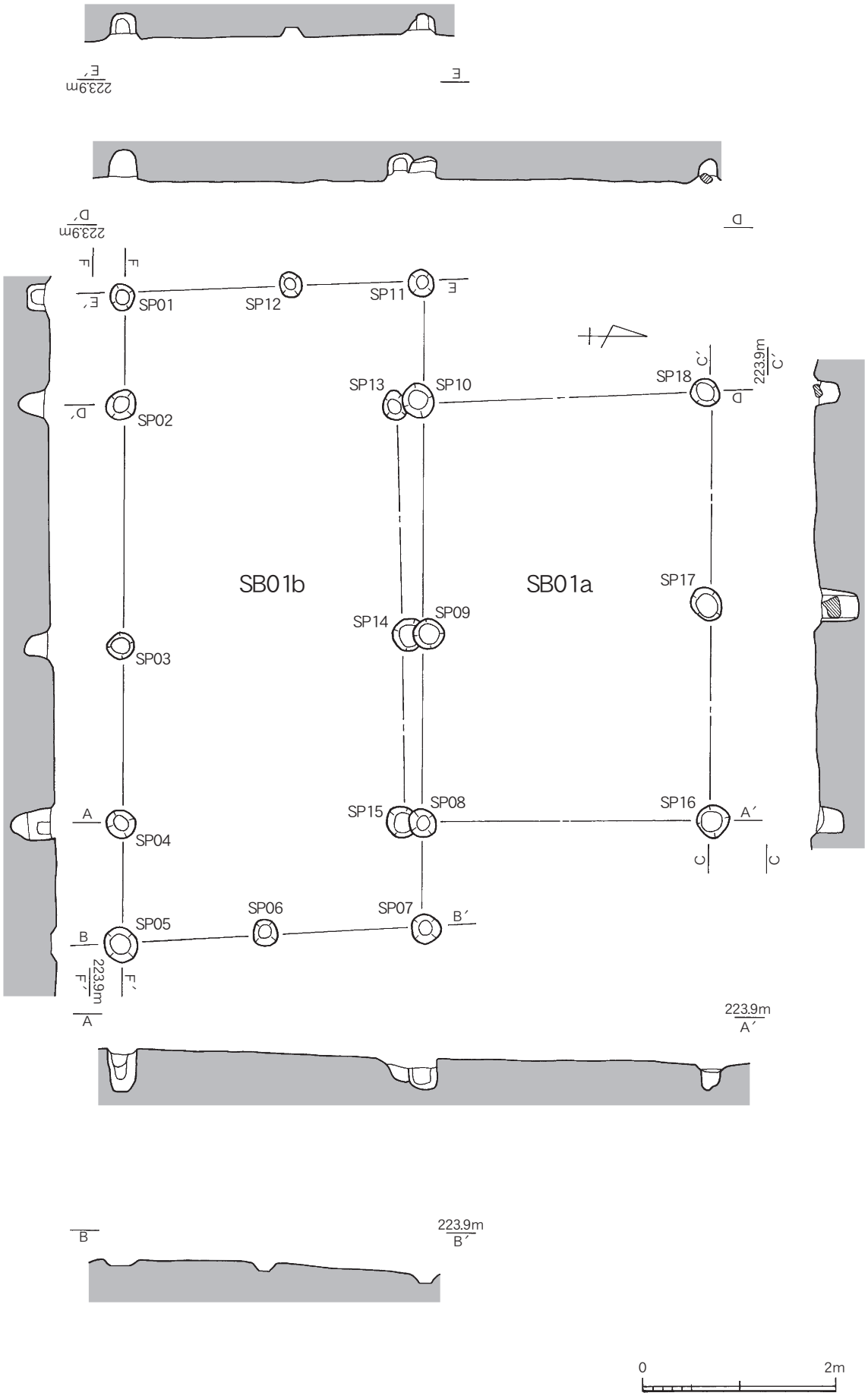
建物は４棟検出されているが、建物主軸方向と柱穴の堀り方の規模から、SB01とSB04、SB02とSB03の２つのグループに分けることができる。建物の年代については、第1節で述べたように、４棟ともに構築年代の決め手となる遺物を伴っていない。従って、柱穴の掘り方の出土遺物に瓦器が含まれていない点と調査地区内から７世紀後半を遡る遺物の出土がないという点から構築年代は７世紀後半から13世紀前半期という漠然とした時代幅でしか捉えられない。ただ、調査区内の出土遺物は、７世紀後半から８世紀にかけての遺物群と12世紀から13世紀の２つの時期の遺物群に大きく分けられることから、比較的大きな柱穴をもつSB02とSB03が前者の時期、比較的小さな柱穴をもつSB01とSB04が後者の時期に該当する可能性はある。いずれにしても、遺構の残存状態が悪く、しかも限られた範囲の中での調査であり、正確な時期決定については調査区周囲の今後の調査に委ねざるを得ない。



第５図　井ノ上森垣内ノ坪遺跡調査区配置図（１：1,000）

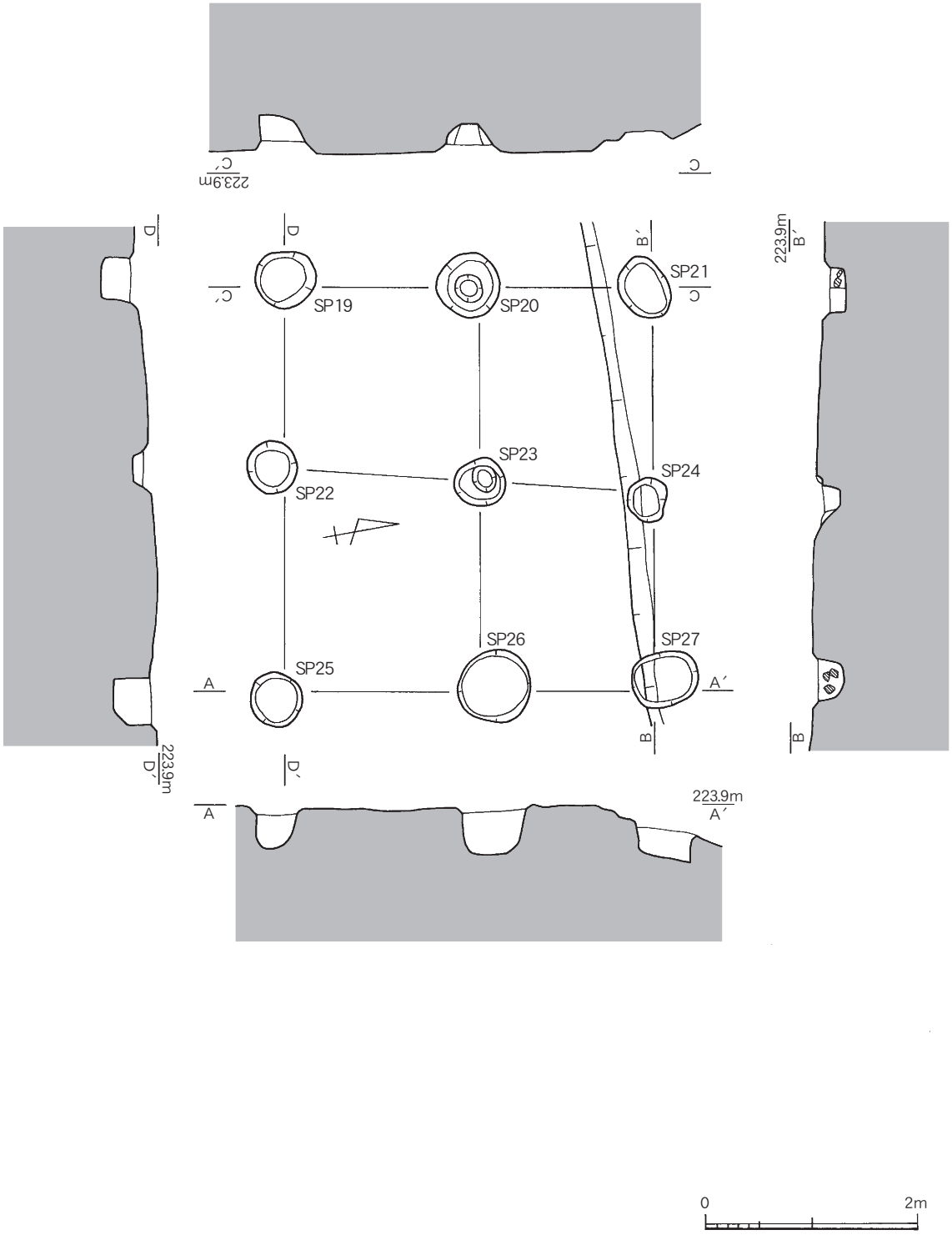


第６図　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区全体図



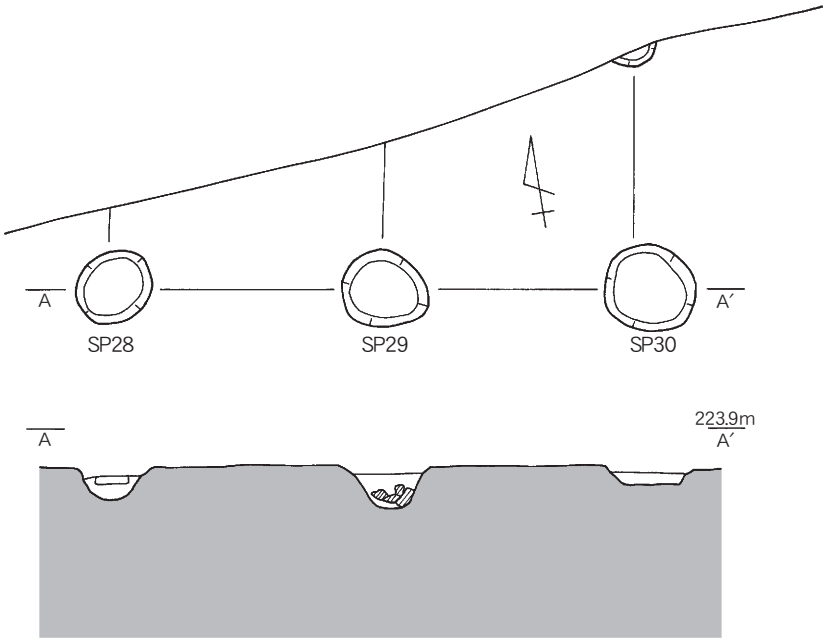
第７図　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区SB01

Ⅱ区　SB02

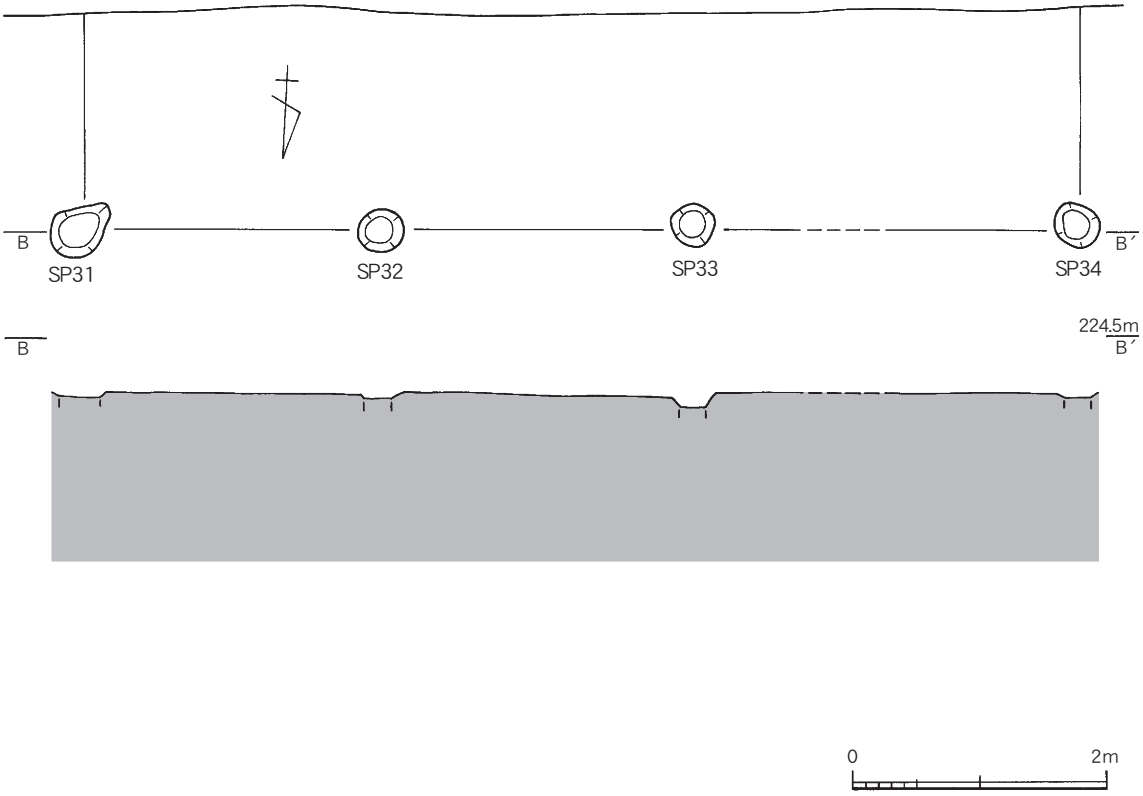


第８図　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区SB02

Ⅱ区　SB03

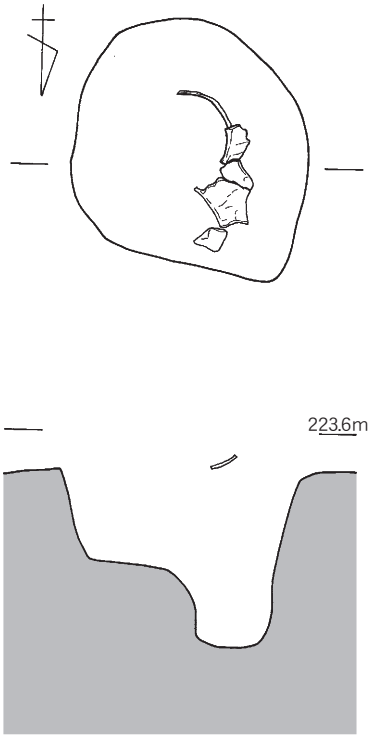


Ⅱ区　SB04

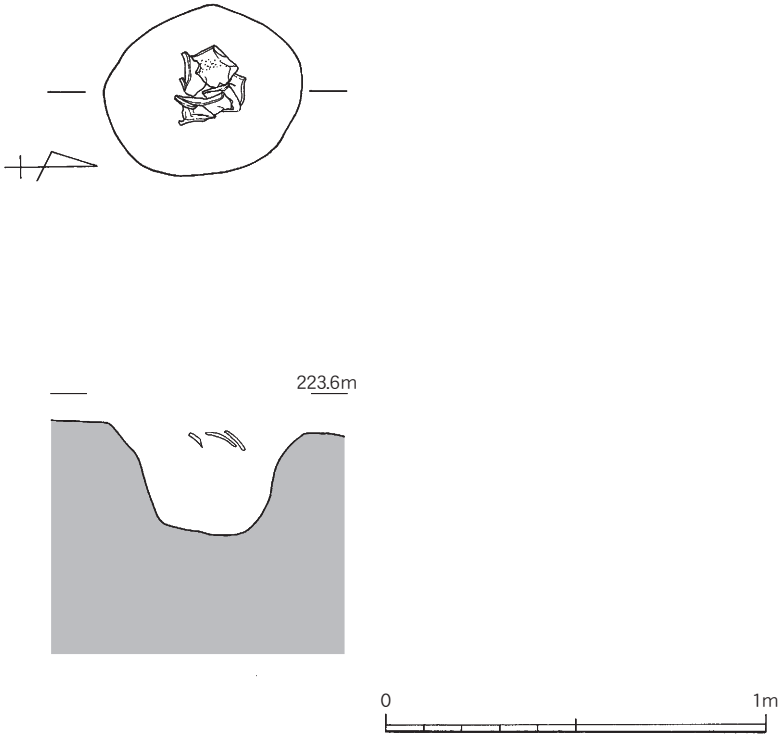


第９図　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区SB03・SB04

Ⅱ区　SK01

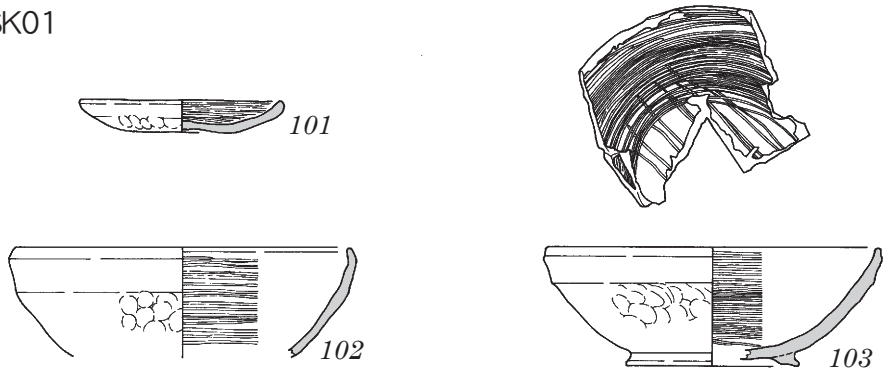


Ⅱ区　SK02

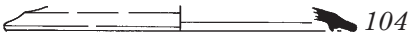


第10図　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区SK01・SK02

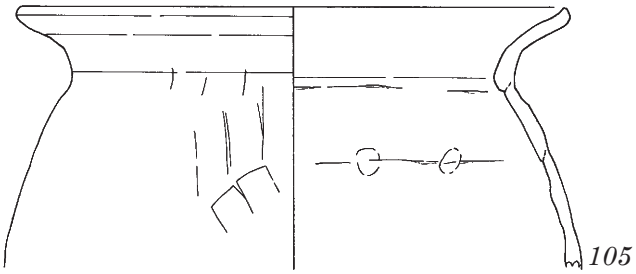
Ⅰ区　SK01



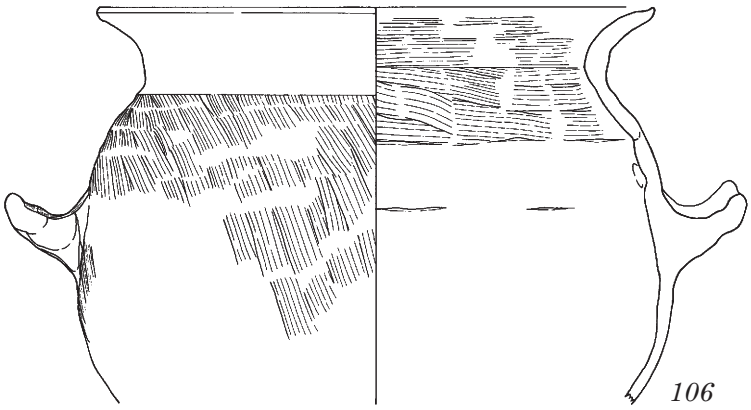
Ⅱ区　SD01

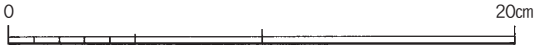


SK01



SK02

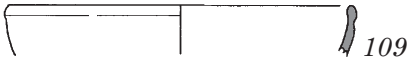


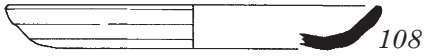


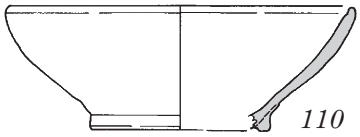
第11図　井ノ上森垣内ノ坪遺跡出土遺物１

Ⅱ区　ピット群

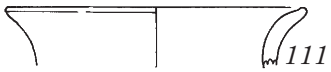
ピット 30





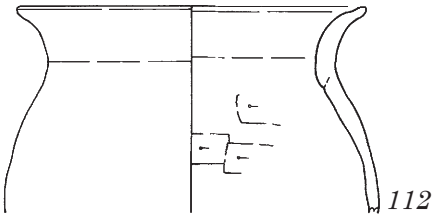


ピット 18

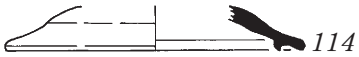


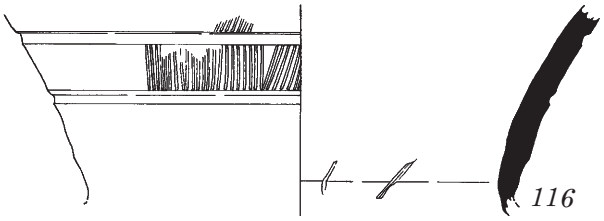
ピット 29

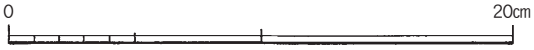
ピット 20



Ⅱ区　包含層







第12図　井ノ上森垣内ノ坪遺跡出土遺物 2

第４章　宮ノ前向井遺跡

第１節　遺跡の立地と遺構

遺跡地は辻川本流が形成した扇状地が段丘化した地形上に立地しており、西側のⅠ区と東側のⅡ区・Ⅲ区に分けて調査を実施した。

Ⅰ区

耕土直下には約20cmの層厚の砂礫を含むシルト質土の堆積層があり、その下に巨礫を含む砂礫層が広がる。この砂礫層をベースとして東西に並ぶ２つの土坑（SX01・SX02）が検出された。ともに径0.7m～0.8m、深さ0.4mを測り、暗灰色のシルト質の埋土中に多量のどんぐりと上面にミカン割り材が包含されていた。包含層から縄文もしくは弥生時代前期と思われる土器１片と石鏃１点が出土していることから縄文もしくは弥生時代前期の貯蔵穴の可能性が高いと判断し、堅果類と木材の放射性炭素年代測定を実施した。分析の結果は第６章で報告されている通り、堅果類・ミカン割り材ともに常緑広葉樹のアカガシ亜属に属する。また、年代値は堅果類が、2480±40年BP、ミカン割り材が2450±40年BPと報告されており、縄文時代晩期～弥生時代前期の年代が報告されている。

Ⅱ区・Ⅲ区

Ⅱ区の耕土直下にはピット群や土坑のほか溝が検出された、遺物をほとんど含んでいないので時期は不明である。また、Ⅲ区は遺物が出土したものの顕著な遺構は検出されていない。

第２節　出土遺物

Ⅰ区

土器（*201*）

粗製の深鉢形の縄文もしくは弥生時代前期の土器と思われるが、細片であるのでどちらかは判断できない。３㎜前後の砂粒を多く含む。表面の剥落が著しく調整の観察は困難である。

石鏃（*202*）

Ⅰ区包含層から出土した凹基式の石鏃である。側縁は先端付近で屈曲しており、使用の過程での折損等により先端部を再加工した可能性がある。石材はサヌカイトで、風化は著しい。長さ17.5㎜、幅16.0㎜、厚さ3.5㎜、重さ0.7ｇ。

Ⅱ・Ⅲ区

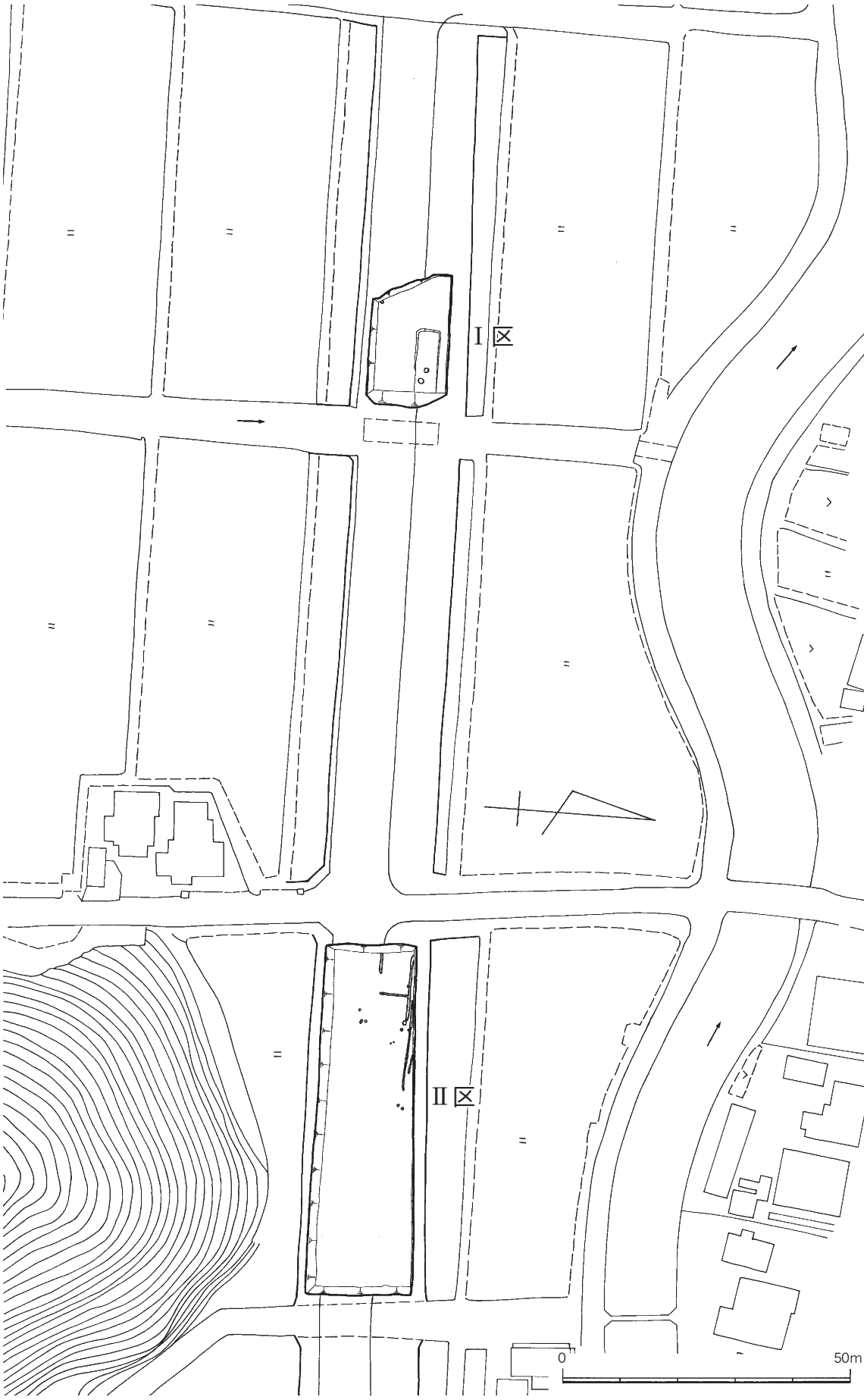
須恵器と土師器が出土している。須恵器には蓋*203*と杯身*205*がある。いずれも８世紀代のものである。土師器には*204*と*206*がある。

第３節　小結

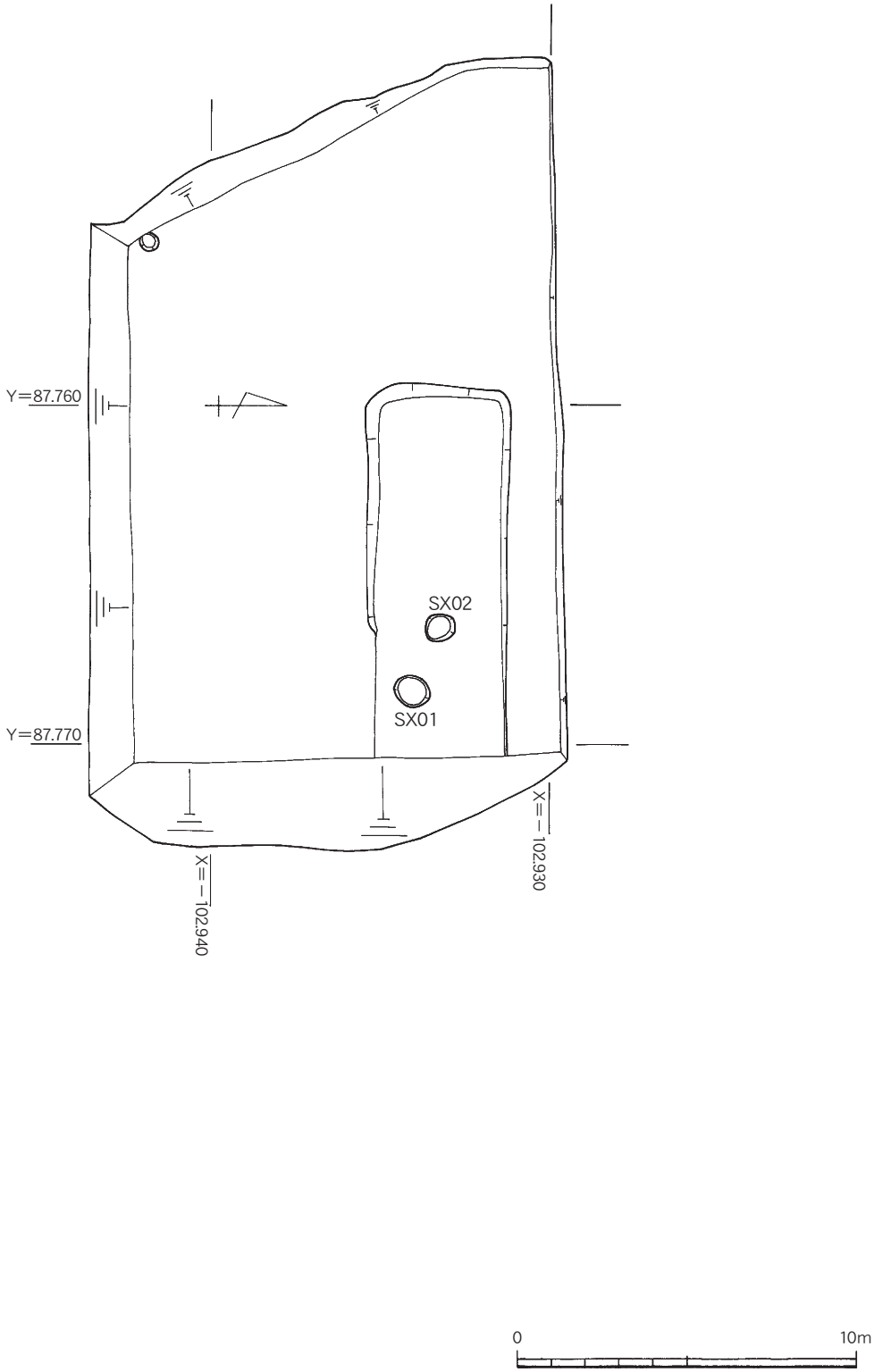
当該遺跡からは縄文晩期～弥生時代前期・奈良時代・鎌倉時代の遺物が出土しているが、遺構については、本来希薄なうえに、以前に行われた圃場整備によって削平を受けて、良好な状態では検出されていない。しかしながら、この中でＩ区で発見された縄文時代晩期～弥生時代前期と思われる遺構の存在が注目される。

遺構は住居址ではなく、堅果類が詰まった土坑２基であるが、近辺に縄文時代から弥生時代にかけての集落址が存在していたことを窺わせる遺構として貴重な発見例である。

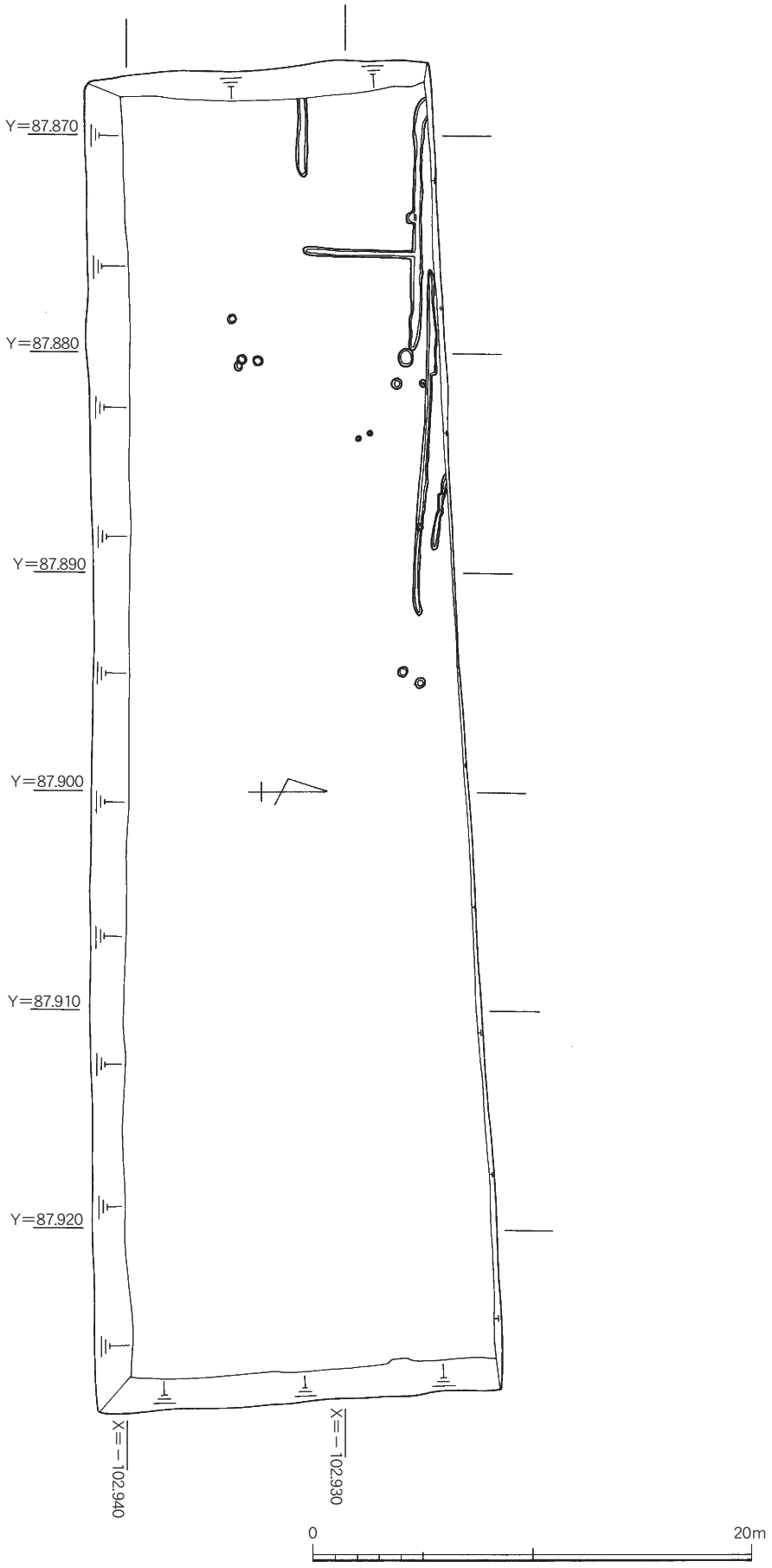
SX01　堅果種子出土状況



第13図　宮ノ前向井遺跡調査区配置図（1：1,000）

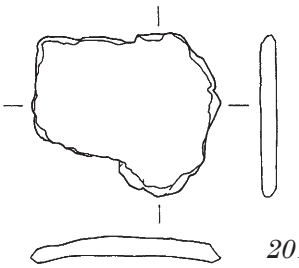


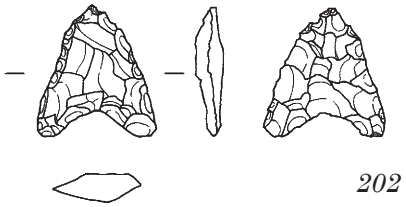
第14図　宮ノ前向井遺跡Ⅰ区全体図



第15図　宮ノ前向井遺跡Ⅱ区全体図

Ⅰ区





Ⅱ区

第16図　宮ノ前向井遺跡出土遺物

第５章　小中追谷口遺跡

第１節　遺跡の立地と遺構

北に張り出す丘陵と辻川に挟まれた幅50m程度の狭隘地にある。第６章　青木哲哉氏の地形分析にあるように、当該遺跡の地形は南側の山地を刻む辻川支流が形成した支流性扇状地が発達したものであるが、従前の圃場整備によって大きく地形が改変されている。とくに当該調査区では遺構面の大半が削平され、遺構の多くが失われている。

SB01

東西４間、南北２間の総柱の建物である。このうちSP14とSP16の間にはもう１つ柱穴（SP15欠番）が存在するはずであるが、検出できなかった。これは柱穴の掘り込み深度が浅く、水田開削時に削平されてしまったものと思われる。柱間は約2.0mを基本とするが、南東隅のSP17がSP18側に寄って設けられているためにSP17-SP18が狭く、また、南西隅のSP01が西寄りに設けられているためにSP01-SP05間が広くなっている。

SP17～SP20の柱列とSP21～SP24の柱列の間隔が１m前後と狭い。庇とみなしておく。また、SP13～SP16の桁行列とSP17～SP20の桁行列の間にSP25とSP26の柱穴が検出されているが、通常の柱列の位置にはない。

柱穴の掘り方の大きさは0.4m～0.5mである。掘り込みの深さは深いもので0.4mあるが、浅いものは0.1～0.2mしかなく、水田開削時に削平されたと思われる。掘り方埋土から瓦器および須恵器が出土している。瓦器は鎌倉時代の年代が与えられるもので、建物群は瓦器の年代と同時期かもしくは後の時代に属することになる。

西南ピット群

調査区西南部に10個程度のピットが削平を免れて残存していた。各ピットの径は0.5m前後である。建物の柱群とすれば、北に展開するはずであるが、当該ピット群より北側は削平をうけて残存しないので、残存ピットのみでは建物跡を復元することはできなかった。

第２節　出土遺物

SB01

瓦器

301・*302*・*304*・*306*・*307*・*310*・*311*の器形はいずれも椀である。*301*は口径11.6cm、器高4.0cm。口縁端部外面のみ吸炭が認められる。軟質で口縁部はやや不成形で、体部は直線的である。高台は低く、外方に踏ん張る。*307*は軟質で、内外面ともに吸炭黒化されているが、光沢面が剥落しており、いわゆる瓦質土器に近い。底部には低く、外方に踏ん張る高台が貼り付けられている。*311*の口縁部は不成形で歪んでおり、縁部はナデ成形により屈曲している。内外面ともに吸炭黒化されているが、磨きの痕跡は口縁部外面と体部の一部に残るのみで他は剥落している。*310*も底部を欠くが、*311*と同じ形態の椀で、口縁部外面を強くなでて屈曲させている。内外面ともに吸炭黒化され、磨きによる光沢面もよく残っている。

*302*は口縁部を欠く。内外面ともに吸炭黒化されているが、光沢面が剥落しており、いわゆる瓦質土器に

近い。*304*・*306*ともに口縁部の破片である。*304*は軟質で、瓦質土器に近い。外面は吸炭黒化されているが、内面は黒化が認められない。*306*は吸炭黒化され、磨きによる光沢がよく残る。内面には横方向の磨きが観察できる。*306*は口縁部のみの破片。内面全体と口縁部外周面に磨き。内面に暗文の一部が認められる。

*303*は底部を欠くが、口径9.2cmの小皿である。内外面とも吸炭黒化されており、内面に暗文を残す。

須恵器（*305*）

底径9.1cmの片口鉢で、底部内面に使用痕跡を残す。底部外面には回転糸切り痕を残す。

土師器（*308*・*309*）

*308*は底径11.0cmを測り、口縁部を欠くので、皿か杯か不明であるが、一応皿とみなしておく。底部外面に指押さえの痕跡を残す。*309*は手づくねの小皿である。

包含層

瓦器（*312*～*314*）・土師器（*315*～*316*）・白磁（*317*）・須恵器（*318*）がある。このうち、*317*は白磁の口縁部破片である。口縁部は端反の形状を呈しており、大宰府編年V類にあたる。

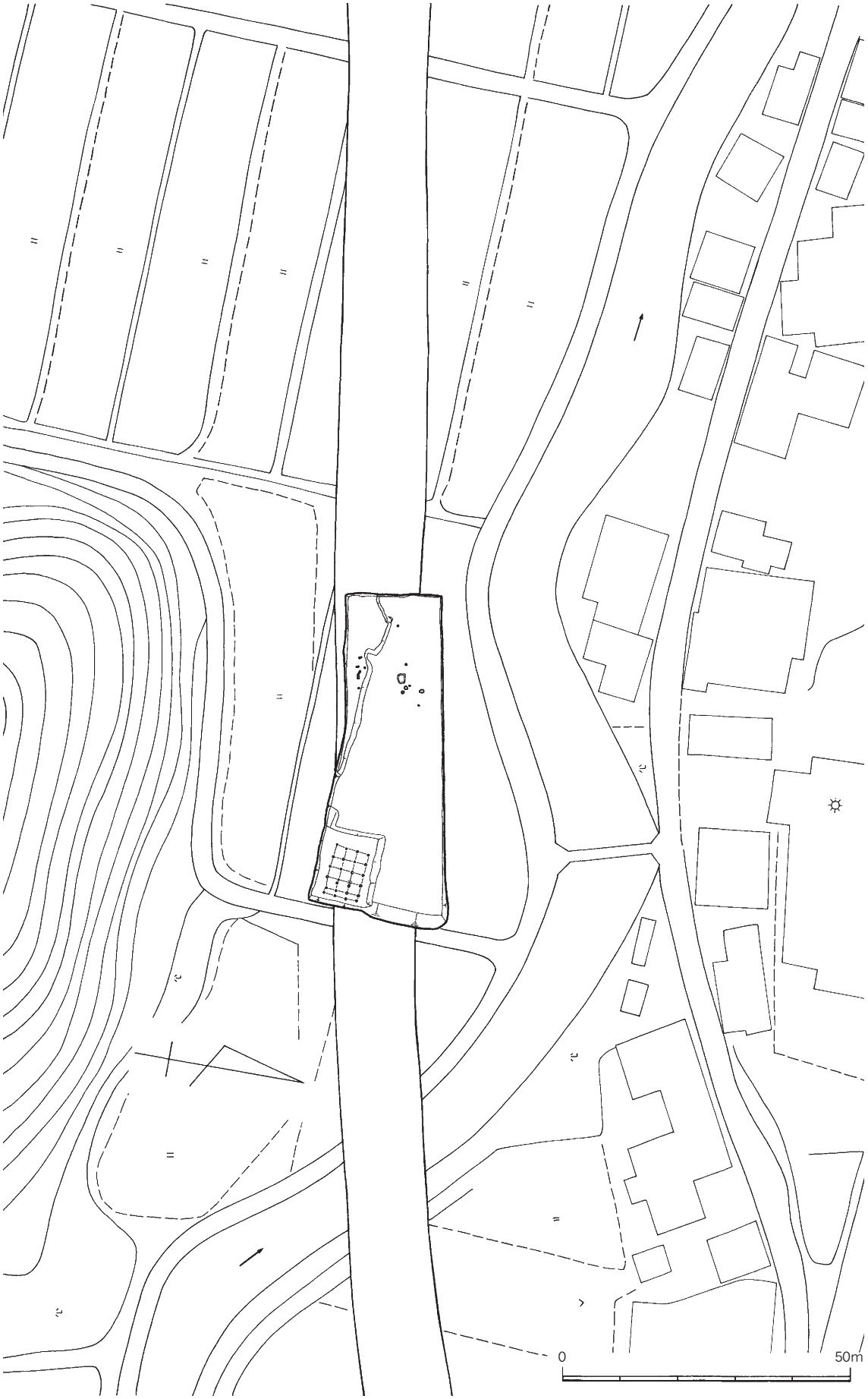
第３節　小結

当該遺跡は丘陵と辻川に挟まれた幅50m程度の狭隘地にあるが、周囲よりも一段高い位置にある。洪水等の恐れもなく、居住地としては良好な立地条件をもつ。しかしながら、以前に行われた圃場整備によって、遺跡地の地盤が大きく切り下げられて、遺構面の大半が失われており、検出された建物遺構はSB01とのみであった。但し、このほかにも建物群が存在したであろうことは、かろうじて残存した西南ピット群の存在からもわかる。

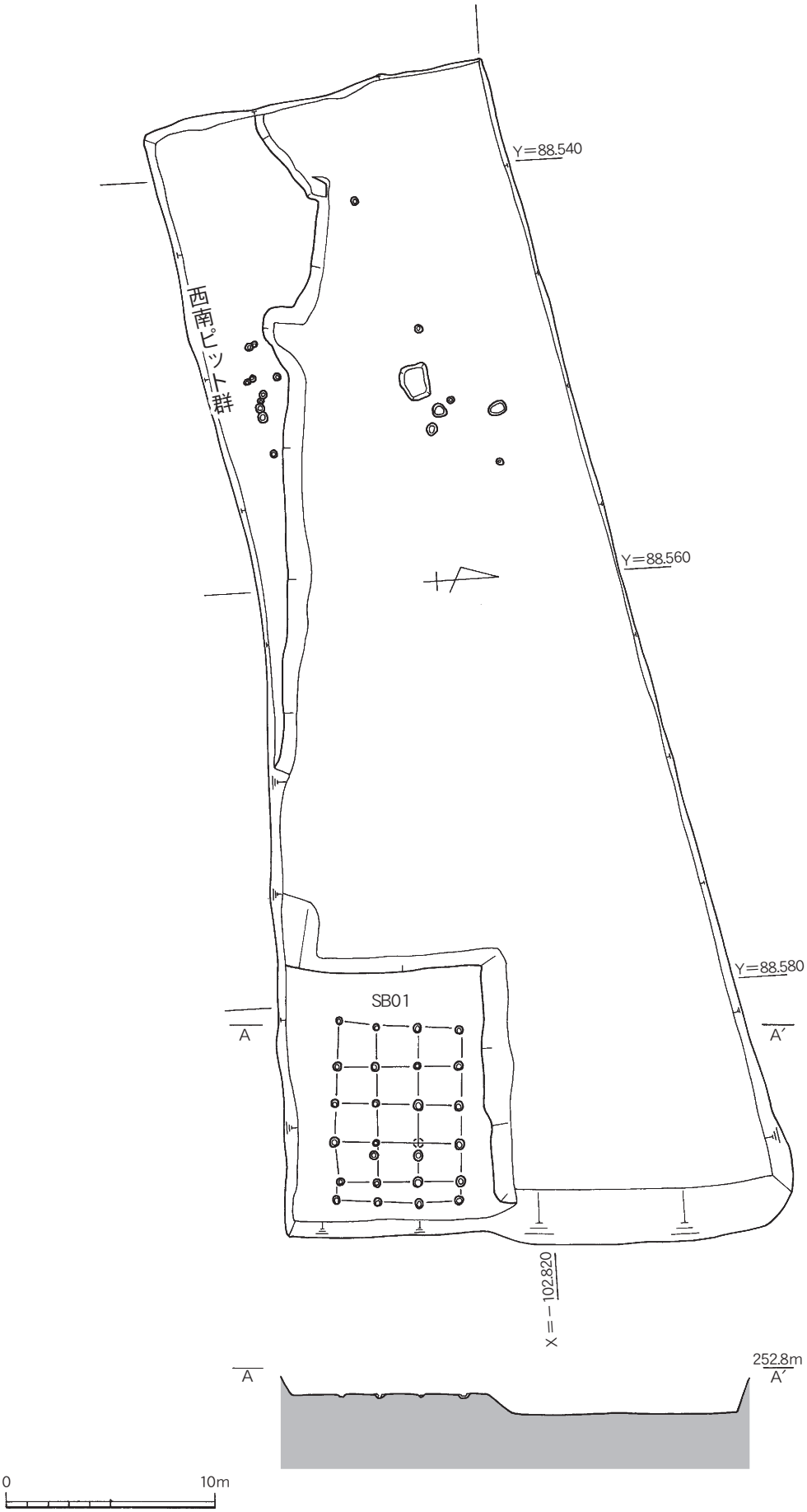
SB01の各柱穴の堀方からは多数の土器片が出土した。出土土器は少量の須恵器、土師器のほかは大半が瓦器である。出土瓦器の年代はこれまでの丹波地方での編年観から鎌倉時代前半頃に比定され、建物の年代は、柱穴掘り方からの出土という点を考慮すれば、鎌倉時代前半を上限としてそれ以降となる。

参考

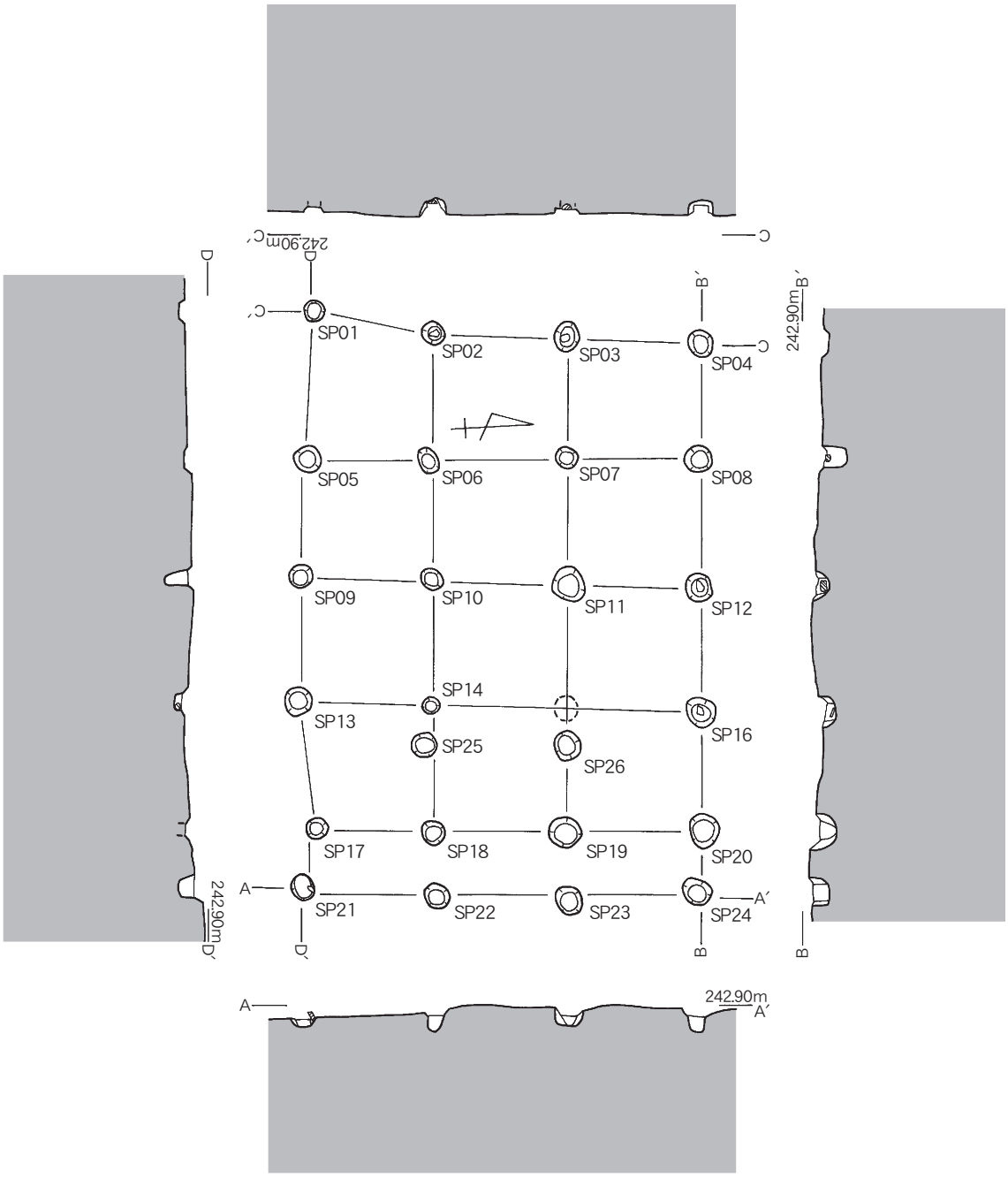
岡﨑　正雄・山田　清朝 他『初田館跡』　1992年　兵庫県教育委員会



第17図　小中追谷口遺跡調査区配置図（1：1,000）



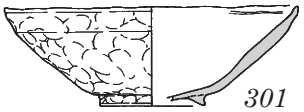
第18図　小中追谷口遺跡全体図

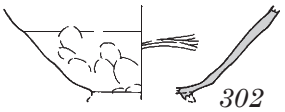


第19図　小中追谷口遺跡SB01

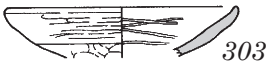
SB01

SP12

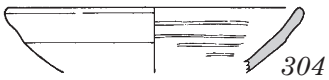


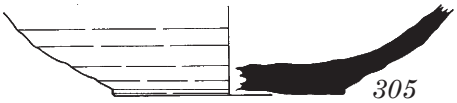


SP14

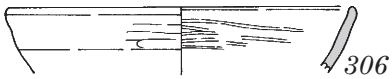


SP15

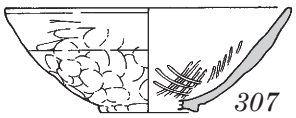




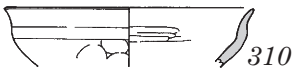
SP20

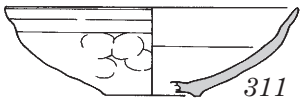


SP21

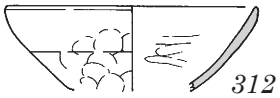


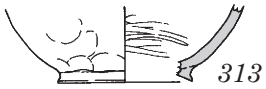
SP25

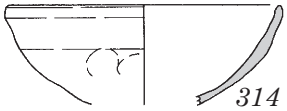




包含層

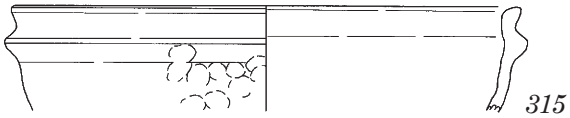


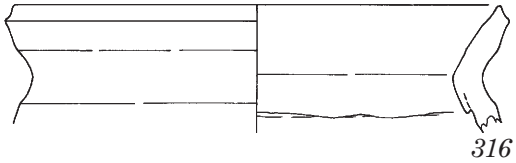


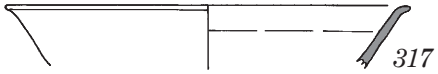


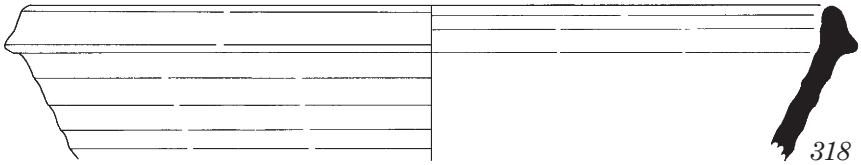
第20図　小中追谷口遺跡出土遺物 1

包含層









第21図　小中追谷口遺跡出土遺物 2

第１表　井ノ上森垣内ノ坪遺跡出土遺物一覧表

番号	種別	器種	法量（cm）			地区	出土遺構	備考
			口径	器高	底径			
101	瓦器	小皿	8.0	1.3	－	Ⅰ区	SK01の上層	
102	瓦器	椀	(13.5)	(4.4)	－	Ⅰ区	SK01	
103	瓦器	椀	(13.3)	4.8	(6.9)	Ⅰ区	SK01	
104	須恵器	杯蓋	(13.7)	(1.0)	－	Ⅱ区	SD01	
105	土師器	甕	21.7	(10.5)	－	Ⅱ区	SK01	
106	土師器	甕	22.1	(15.9)	－	Ⅱ区	SK02	
107	須恵器	蓋	(15.0)	(2.6)	－	Ⅱ区	ピット30	遺構データ滅失により遺構位置不明
108	須恵器	皿	(15.0)	1.8	－	Ⅱ区	ピット30	
109	白磁	碗	(13.8)	(2.0)	－	Ⅱ区	ピット30	
110	瓦器	椀	(13.8)	6.0	(7.3)	Ⅱ区	ピット30	
111	土師器	甕	(12.0)	(2.4)	－	Ⅱ区	ピット18	
112	土師器	甕	(13.8)	(8.3)	－	Ⅱ区	ピット20	
113	瓦器	椀	－	(1.0)	(6.7)	Ⅱ区	ピット29	
114	須恵器	杯蓋	(11.8)	(1.8)	－	Ⅱ区	包含層	
115	須恵器	杯	(8.8)	2.8	－	Ⅱ区	包含層	
116	須恵器	甕	－	(8.5)	－	Ⅱ区	包含層	

第２表　宮ノ前向井遺跡出土遺物一覧表

番号	種別	器種	法量（cm）			地区	出土遺構	備考
			口径	器高	底径			
201	土器	破片	長 (7.5)	幅 (6.5)	－	Ⅰ区	包含層	
202	石器（縄文時代）	石鏃	長1.75	幅1.60	厚0.35	Ⅰ区	包含層	重さ0.7g
203	須恵器	杯蓋のつまみ部	－	(1.8)	－	Ⅱ区	包含層	
204	土師器	小皿	(8.0)	1.5	－	Ⅱ区	包含層	
205	須恵器	坏	－	(1.2)	(1.0)	Ⅱ区	包含層	
206	土師器	椀	－	(1.4)	(7.9)	Ⅱ区	包含層	

第３表　小中追谷口遺跡出土遺物一覧表

番号	種別	器種	法量（cm）			地区	出土遺構	備考
			口径	器高	底径			
301	瓦器	椀	(11.6)	4.0	(4.3)		SB01　SP12	
302	瓦器	椀	－	－	－		SB01　SP12	
303	瓦器	小皿	(9.2)	－	－		SB01　SP14	
304	瓦器	椀	(11.6)	－	－		SB01　SP15	
305	須恵器	片口鉢	－	－	(9.1)		SB01　SP15	
306	瓦器	椀	(13.9)	－	－		SB01　SP20	
307	瓦器	椀	(11.4)	4.2	(3.9)		SB01　SP21	
308	土師器	皿	－	－	(11.0)		SB01　SP21	
309	土師器	皿	(8.5)	1.5	－		SB01　SP25	
310	瓦器	椀	(10.0)	－	－		SB01　SP25	
311	瓦器	椀	(11.4)	4.3	(5.4)		SB01　SP25	
312	瓦器	椀	(10.0)	－	－		包含層	
313	瓦器	椀	－	－	(5.3)		包含層	
314	瓦器	椀	(10.8)	－	－		包含層	
315	土師器	堝	(20.0)	－	－		包含層	
316	土師器	甕	(19.3)	－	－		包含層	
317	白磁	碗	(16.0)	－	－		包含層	
318	須恵器	鉢	(32.0)	－	－		包含層	

第６章　自然科学分析

Ⅰ　小中追谷口遺跡、宮ノ前向井遺跡および井ノ上森垣内ノ坪遺跡の地形環境

青木　哲哉（立命館大学非常勤講師）

１．はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査区では、微地形の観察や堆積物の詳細な区分ができ、地形環境を細かいオーダーで復原できる。同時に、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。考古遺跡の調査区では、地形環境と人間生活の係わりについても考察できるのである。

本稿では、篠山盆地東部に位置する小中追谷口遺跡、宮ノ前向井遺跡、ならびに井ノ上森垣内ノ坪遺跡の地形環境を明らかにしたい。調査では、空中写真の判読と現地踏査にもとづいて地形を分類するとともに、各遺跡の調査区で堆積物の観察を実施した。地形分類は10,000分の１空中写真を用いて行った。また、堆積物に関しては、遺構検出面より上位のものだけでなく、そこから掘削したトレンチ断面で遺構検出面以深の堆積物を観察した。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に発掘調査の成果を加えて、調査区付近における地形環境の考察を行った。

２．小中追谷口遺跡について

⑴　調査区付近の地形分布

本遺跡の調査区は篠山盆地東部で篠山川に合流する辻川流域の平野に位置する。周囲には山地が分布し、平野は西流する辻川に沿ってほぼ東西に延びる。そこには、更新世段丘がみられず、完新世段丘、現氾濫原、および支流性扇状地が認められる（第22図）。これらのうち、調査区は辻川南岸にみられる支流性扇状地の扇端付近に位置する。

支流性扇状地は、山麓に分布する小規模な扇状地で、背後の山地を刻む谷から堆積物が供給されてつくられる。調査区周辺では、この地形が辻川の南岸で比較的よく発達している。これらは平均およそ6.6％の地表傾斜でおおむね北へ高度を下げ、完新世段丘と傾斜変換線で接する。ただし、支流性扇状地と完新世段丘の境界は40～50年前の圃場整備によって明瞭でない。調査区はこうした支流性扇状地の埋没旧中州上にみられる。

⑵　調査区における堆積物の特徴

調査区では、下位から順に灰黄色のシルト質砂礫（第23図の堆積物11）、黄灰白色の砂（同10）、黄灰色の砂礫（同９）、黄灰色の砂（同８）、黄灰色のシルト質砂礫（同７）、黄灰色の砂礫混じりシルト（同６）、黄

灰色の砂質シルト（同５）、暗褐灰色の砂礫（同４）、灰黒色のシルト（同３）、黄灰色の砂礫混じりシルト（同２）、暗黄灰色のシルト（同１）、ならびに現耕土・盛土が認められる（第23図）。これらのうち、遺構検出面は暗黄灰色のシルト（同１）の上面であり、調査区南東部ではそこから13世紀の総柱建物（倉庫）跡が検出されている。

黄灰色のシルト質砂礫（同７）より下位は扇状地堆積物に相当する。これらは主に砂礫からなり、その間に砂がレンズ状にはさまれる。とくに黄灰色の砂礫（同９）は、径６～20cmの亜角礫を主体とし、径34cmの巨礫を含む。これらの堆積物は扇状地の微地形である旧中州を構成するものにあたる。

黄灰色の砂礫混じりシルト（同６）より上位は、扇状地を被覆する堆積物で、調査区西部を除いて約１ｍの厚さをもつ。これらは、洪水に伴ってもたらされたものであり、主にシルトや砂質シルトなどからなる。

中でも、灰黒色のシルト（同３）は土壌化が著しく進んだ堆積物である。厚さが30cm前後あり、長期間にわたって表土となっていたことが知られる。こうした細粒堆積物には、暗褐灰色の砂礫（同４）が部分的にはさまれる。これは扇状地堆積物より小さい径１～５cmの亜角礫を主体とする。

⑶　地形環境の変遷

これまでに述べた地形と堆積物の特徴から次のような地形環境が考察される。

〔ステージ１〕　調査区付近では、南側の谷から洪水が幾度も発生し、砂礫や砂が堆積した。これに伴って比較的急傾斜の扇状地が発達していった。その際、調査区付近には中州が形成された。

〔ステージ２〕　調査区南側の谷からは砂礫混じりシルトや砂質シルトがもたらされ、これらが扇状地を被覆していった。その後も砂礫が局所的に堆積し、調査区付近の中州は埋没した。

〔ステージ３〕　調査区付近では、シルトの堆積後に洪水の及ばない安定した環境が訪れた。この環境は比較的長い期間にわたって続き、表土であったシルトの土壌化が著しく進んだ。その結果、灰黒色のシルトが生成された。

〔ステージ４〕　砂礫混じりシルトやシルトが洪水によって堆積し、旧中州はさらに深く埋没した。13世紀になると、わずかに高いこの埋没旧中州上に総柱建物が建てられた。

３．宮ノ前向井遺跡Ⅰ～Ⅲ区について

⑴　調査区付近の地形分布

この遺跡のⅠ～Ⅲ区は辻川南岸の完新世段丘に位置する。辻川沿いの平野（沖積低地）は完新世段丘と現氾濫原に分けられる（第22図）。完新世段丘は発達がよく、平野の大部分を占める。段丘面は、下流へ緩やかに傾斜し、現氾濫原との境界には比高約１ｍの段丘崖が認められる。他方、現氾濫原は、最も低い地形面で、洪水時に冠水の危険性が高い。これは辻川の流路に沿って断続的に分布する。ただし、辻川南岸では、圃場整備による人工改変のため、現氾濫原の分布が極めて不明瞭になっている。

調査区周辺の完新世段丘は、主に辻川によって形成された扇状地が段丘化したものである。そのため、扇状地でみられる微地形のうち、埋没旧河道がⅠ区の中央部から西部にかけて延び、東端には埋没旧中州の末端が認められる。Ⅰ区より約100m上流（東）に位置するⅡ区とその東側に隣接するⅢ区では、微地形の状況が判然としない。おそらくⅡ区とⅢ区東半部は埋没旧中州上に、またⅢ区西半部は埋没旧河道上に位置すると推定される。

⑵　調査区における堆積物の特徴

(a)　Ⅰ区の堆積物

Ⅰ区では、下位から黄褐色のシルト質砂礫（第24図の堆積物４）、黄褐色のシルト（同３）、褐灰色の砂礫（同１）、黄褐色のシルト、ならびに現耕土・盛土が認められる（第24図）。ここでの遺構検出面は現耕土の下位にみられる黄褐色シルトの上面であり、Ⅰ区東半部では縄文時代晩期～弥生時代前期の貯蔵穴跡（SX01・02）が２基検出されている。

黄褐色のシルト質砂礫（同４）は扇状地の旧中州堆積物にあたる。これは径４～８cmの亜角礫を主体とする。その上位に位置する黄褐色のシルト（同３）、褐灰色の砂礫（同１）、および黄褐色のシルトは扇状地を覆う堆積物である。これらのうち黄褐色シルト（同３）の上面からは、Ⅰ区の中央部から西部を通る旧河道が切り込まれる。これは、辻川の流路跡と推定され、径１～３cmの亜角礫からなる黄褐色の砂礫（同２）に埋積されている。

縄文時代晩期～弥生時代前期の貯蔵穴跡はこのような埋没旧中州と埋没旧河道の境界付近に分布する。貯蔵穴跡は現耕土の下位に位置する黄褐色シルトを切ってつくられており、それらを埋める堆積物からは種実と材が検出されている。これらはそれぞれ2,530±40yrBP（Beta-158177）と2,500±40yrBP（Beta-158176）の放射性炭素年代測定値を示す[1)]。

(b)　Ⅱ区の堆積物

Ⅱ区で確認された堆積物は、下位から順に緑灰色の礫混じり砂質シルト（第25図の堆積物７）、緑灰色の砂礫混じりシルト（同６）、黒褐色のシルト（同５）、灰色のシルト（同４）、灰褐色のシルト質砂礫（同３）、黄灰色のシルト（同２）、灰色のシルト（同１）、および現耕土・盛土である（第25図）。これらのうち、黄灰色シルト（同２）の上面が遺構検出面にあたる。

最下位にみられる緑灰色の礫混じり砂質シルト（同７）以深には、扇状地を構成する砂礫が存在すると推定される[2)]。Ⅱ区で観察された堆積物は、この扇状地を覆うもので、ほとんどが細粒堆積物である。中でも黒褐色のシルト（同５）は、20～30cmの厚さがあり、洪水による堆積後に土壌化された旧表土にあたる。このシルトは小中追谷口遺跡の調査区で認められる灰黒色のシルトに連続する可能性がある。さらに上位にみられる灰褐色のシルト質砂礫（同３）は、細粒堆積物の間にはさまれるもので、Ⅱ区北部に局所的に分布している。礫は径１～２cmの亜角礫を主体とする。

(c)　Ⅲ区の堆積物

Ⅲ区では、下位から黄灰色の砂礫（第26図の堆積物13）、黄灰白色のシルト（同12）、灰黄色の砂質シルト（同11）、黄褐色のシルト（同10）、褐色のシルト（同８）、黄褐色のシルト（同６）、灰色のシルト質砂（同５）、黄灰色のシルト質砂礫（同４）、灰色のシルト（同３）、灰黒色のシルト（同２）、現耕土、ならびに盛土（同１）が観察される（第26図）。遺構検出面は灰黒色のシルト（同２）上面である。

黄灰色の砂礫は扇状地堆積物に該当する。これは、少なくとも1.2mの厚さをもち、Ⅲ区の全域に広がる。礫は径３～８cmの亜角礫を主体とする。これより上位の堆積物は、基本的に扇状地を被覆するものである。全体の厚さが約１mで、多くが細粒堆積物にあたる。

Ⅲ区西部では、これらのうち黄褐色のシルト（同10）と褐色のシルト（同８）をそれぞれ切る旧河道が認められる。前者の旧河道は幅およそ５m、深さ50～60cmで、後者は幅３m以上、深さが約50cmである。両者は、ともに南北に延びる小規模な流路跡であり、Ⅲ区南側の谷から流下する支流の流路跡と考えられる。これらは、径３cm以下の亜角礫からなる灰色の砂礫（同７・９）によって埋積され、さらにその上を褐色のシルト（同８）から灰黒色のシルト（同２）までの堆積物に覆われる。この灰黒色

シルト（同２）は灰色シルト（同３）の土壌化によって生成された旧表土である。これはⅡ区でみられる黒褐色のシルト（第25図の堆積物５）につながると考えられる。

⑶　地形環境の変遷

これまでの事柄から復原される地形環境は次のとおりである。

〔ステージ１〕　調査区付近では、辻川によって砂礫がもたらされ、扇状地が発達した。この時、Ⅰ区東端からその東側にかけて中州が形成された。

〔ステージ２〕　扇状地の形成後、辻川の氾濫によってシルトや砂質シルトが扇状地上を覆った。そのため、扇状地は埋没した。

〔ステージ３〕　Ⅰ区では、扇状地上を被覆したシルトを切って辻川の流路が形成された。また、Ⅲ区の西半部にも、南の谷から流れる小規模な支流が扇状地を覆うシルト上を流下した。この流路が埋積され、さらにシルトの堆積によって埋没した後、Ⅲ区西半部では再び支流が流れた。

〔ステージ４〕　調査区付近では、砂礫やシルト質砂、シルトなどの堆積が辻川の洪水に伴ってなされた。これによってⅠ区とⅢ区西半部の旧河道は埋没した。

〔ステージ５〕　Ⅱ区とⅢ区でシルトが堆積した後、調査区付近は洪水の起こらない安定した環境となった。こうした環境下でシルトが土壌化し、Ⅱ区とⅢ区では黒褐～灰黒色のシルトが生成された。

〔ステージ６〕　辻川の洪水が発生し、Ⅰ区とⅡ区ではシルトが堆積した。その後2,500年前ころになると、Ⅰ区では人間活動がみられ、埋没した旧中州と旧河道の境界付近に貯蔵穴がつくられた。

４．井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅰ・Ⅱ区について

⑴　調査区付近の地形分布

本遺跡のⅠ・Ⅱ区も辻川南岸の完新世段丘に位置する（第22図）。そこは、宮ノ前向井遺跡Ⅰ区より約300m下流（西）にあたり、段丘面が比較的広く発達している。Ⅰ区では、東半部に埋没旧中州が、また西半部に埋没旧河道が分布し、その東側に隣接するⅡ区は主に埋没旧中州上に位置する。

⑵　調査区における堆積物の特徴

⒜　Ⅰ区の堆積物

Ⅰ区における堆積物は、下位から順に黄灰色の砂礫（第27図の堆積物９）、黄灰色のシルト（同８）、暗褐灰色の砂礫混じりシルト（同４）、黄褐色のシルト（同３）、黄灰色のシルト質砂礫（同２）、黄灰色のシルト（同１）、および現耕土・盛土である（第27図）。これらのうち、黄灰色シルト（同１）の上面が遺構検出面にあたり、Ⅰ区北東部ではそこから13世紀の土坑が検出されている。

黄灰色の砂礫（同９）は、扇状地堆積物で、旧中州を構成するものである。これはⅠ区の東半部に分布し、上面は東に向かって高くなる。礫は径２～６cmの亜角礫を主体とする。この砂礫より上位の堆積物は、扇状地を被覆するもので、60～70cmの厚さをもつ。これらの多くはシルトであり、その間にシルト質砂礫が２つはさまれる。そのうち上位の黄灰色シルト質砂礫（同２）は、断続的に分布し、主に径0.5～２cmの亜角礫からなる。これは扇状地堆積物に比して粒径の小さい礫を主体とする。

Ⅰ区の西半部では、辻川の旧河道が２つ認められる。ひとつは、Ⅰ区西半部のほぼ全域を通る旧河道で、黄灰色シルト（同８）の上面から切り込む。これは灰黄色と暗褐灰色のシルト質砂礫（同６・７）に埋積されており、灰黄色のシルト質砂礫（同７）はⅠ区東半部の旧中州上にまで堆積が及ぶ。もう一

つの旧河道は、この旧河道堆積物を切って形成されたもので、Ⅰ区の西端に分布する。これは暗褐灰色のシルト質砂礫（同５）に埋積される。いずれの旧河道も60cm以上の深さがあり、前者については広い幅をもつことが確認されている。

⑵　Ⅱ区の堆積物

Ⅱ区では、下位から灰色のシルト質砂礫（第28図の堆積物13)、暗灰色のシルト（同12)、黄灰色のシルト質砂礫（同11)、灰黄色のシルト（同10)、暗褐灰色の砂礫（同９）、黒褐色のシルト（同５）、暗黄灰色の砂礫混じりシルト（同４）、暗褐灰色のシルト質砂礫（同３）、オリーブ褐色の礫混じり砂質シルト、黄灰色のシルト、ならびに現耕土・盛土が認められる（第28図)。ここでは、遺構検出面の層位が暗褐灰色シルト質砂礫（同３）の上面である。そこからは、７世紀末～13世紀の掘立柱建物跡が２棟と、13世紀の総柱建物跡が２棟検出されている。

暗褐灰色の砂礫（同９）より下位の堆積物は扇状地の旧中州を構成するものに相当する。これらは、主に砂礫やシルト質砂礫で、間に厚さ20～30cmのシルトをはさむ。砂礫とシルト質砂礫に含まれる礫は径１～８cmの亜角礫を主体とし、最上位の暗褐灰色砂礫（同９）はⅠ区でみられる黄灰色の砂礫（第27図の堆積物９）に連続する。Ⅱ区の中央やや西寄りには、この砂礫（第28図の堆積物９）を切る旧河道が認められる。これは、幅およそ４m、深さ40～50cmの小規模な旧河道で、南の山地から流下する支流の流路跡と考えられる。この流路は、径２cm以下の亜角礫を主体とする暗黄灰色の砂礫（同８）と黄灰色のシルト質砂礫（同７)、および灰黄色の礫混じり砂質シルト（同６）に埋積されている。

黒褐色のシルト（同５）から暗褐灰色のシルト質砂礫（同３）までは扇状地を覆う堆積物にあたる。厚さは20～30cmである。これらのうち黒褐色のシルト（同５）は、土壌化の進んだ旧表土で、Ⅱ区の西端にみられる。この堆積物は宮ノ前向井遺跡Ⅱ区とⅢ区で観察される黒褐色のシルト（第25図の堆積物５）や灰黒色のシルト（第26図の堆積物２）に連続する可能性が高い。なお、その上位に位置する暗黄灰色の砂礫混じりシルト（第28図の堆積物４）と暗褐灰色のシルト質砂礫（同３）は、それぞれⅠ区の暗褐灰色砂礫混じりシルト（第27図の堆積物４）と黄灰色シルト質砂礫（同２）につながる。

⑶　地形環境の変遷

これまでに述べた事柄からは次のような地形環境が復原される。

〔ステージ１〕　調査区付近では、辻川の度重なる洪水によって主に砂礫が堆積した。これに伴って、宮ノ前向井遺跡と同じ時期に扇状地が発達し、Ⅰ区東半部からⅡ区にかけて中州が形成された。

〔ステージ２〕　Ⅰ区では、辻川の氾濫が及び、シルトが扇状地上を薄く被覆した。一方、Ⅱ区では辻川の小規模な支流が中央部やや西寄りをほぼ南北に流れた。この流路はその後砂礫や礫混じり砂質シルトなどによって埋積された。

〔ステージ３〕　辻川が流路変更に伴ってⅠ区の西半部を２度流下した。最初は、Ⅱ区西半部のほぼ全域に流路が形成され、これを埋積したシルト質砂礫はその堆積がⅡ区東半部の旧中州上にまで及んだ。２度目の流下はⅡ区西端でみられ、この流路もシルト質砂礫によって埋積された。

〔ステージ４〕　調査区付近には、洪水の発生しない安定した環境が訪れた。こうした環境下で表土の土壌化が進み、Ⅱ区西端では黒褐色のシルトが生成された。この現象は同じ時期に小中追谷口遺跡と宮ノ前向井遺跡Ⅱ・Ⅲ区でもみられた。

〔ステージ５〕　シルトやシルト質砂礫などが、辻川による数度の洪水に伴って堆積し、扇状地上を覆った。

その結果、旧中州と旧河道はほぼ完全に埋没した。その後Ⅱ区の埋没旧中州上では、７世紀末～８世紀に

掘立柱建物が、また13世紀には総柱建物が建てられた。

〔ステージ６〕 13世紀以降には、辻川が氾濫し、シルトの堆積がみられた。その後、調査区付近の地形面（平野）は辻川の下刻に伴って段丘化した。

５．おわりに

小中追谷口遺跡、宮ノ前向井遺跡、および井ノ上森垣内ノ坪遺跡は篠山盆地東部の辻川に沿う平野に位置する。この平野には、完新世段丘、現氾濫原、ならびに支流性扇状地が認められ、これらのうち小中追谷口遺跡の調査区は支流性扇状地に、また宮ノ前向井遺跡Ⅰ～Ⅲ区と井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅰ・Ⅱ区は完新世段丘にみられる。

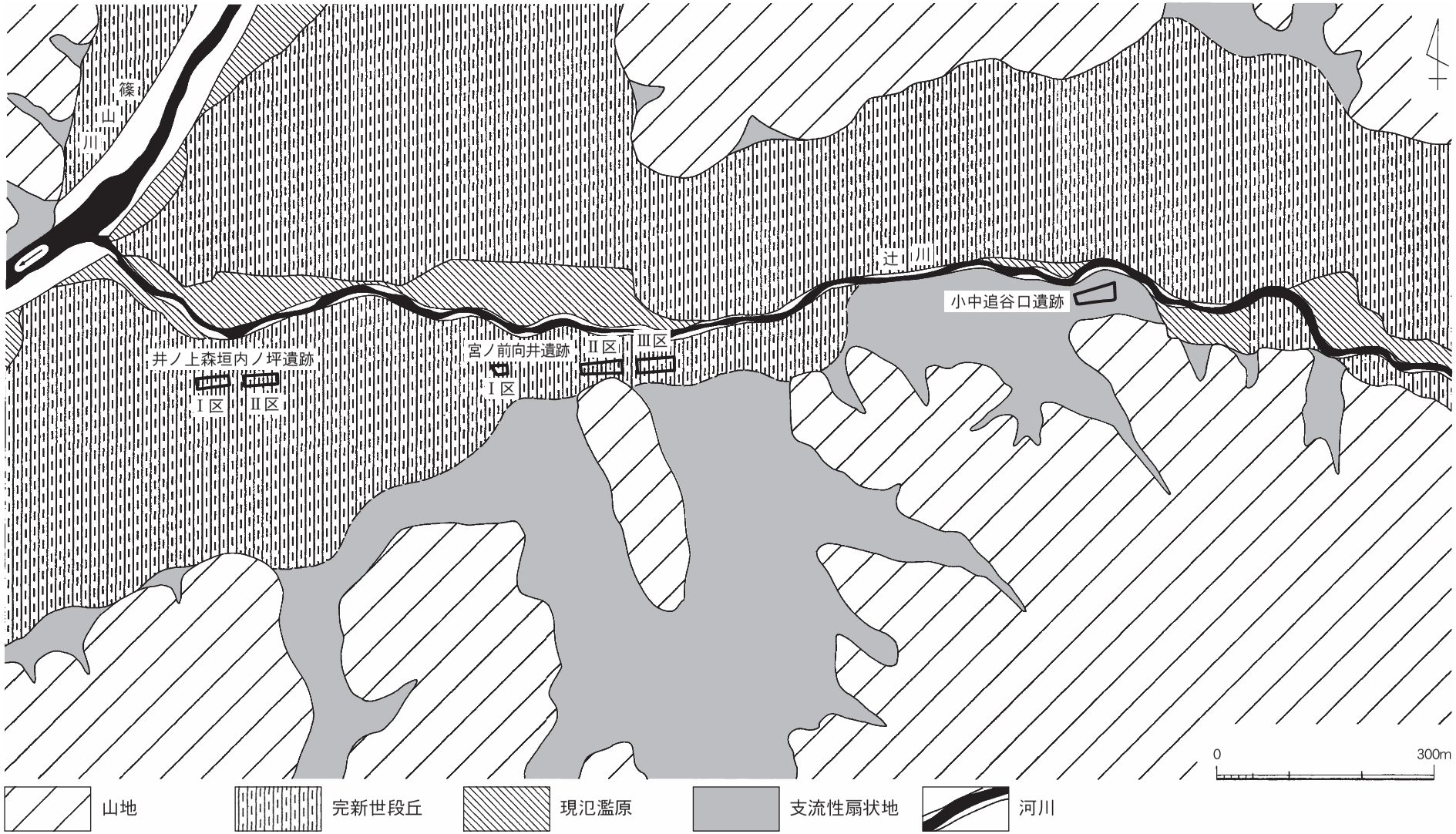
小中追谷口遺跡の調査区は支流性扇状地の埋没旧中州上に位置する。この旧中州は、南側の谷から砂礫とシルト質砂礫が供給されてできたもので、これはその後細粒堆積物によって覆われ埋没した。埋没旧中州上は周囲より高燥であるため、そこには13世紀に総柱建物が建てられた。他方、宮ノ前向井遺跡Ⅰ区とⅢ区西半部には旧河道が分布する。これらはいずれも扇状地が埋没する過程で形成されたものである。Ⅰ区は、東端が埋没旧中州の末端上に、また他の範囲が辻川の埋没旧河道上に位置する。ここでは、旧河道が埋もれた後の約2,500年前に、埋没した旧中州と旧河道の境界付近に貯蔵穴がつくられた。また、Ⅲ区西半部には南から延びる小規模な支流の旧河道が２つ存在する。そのため、Ⅲ区は高燥な環境を必要とする居住域や墓域に利用されなかったと考えられる。

井ノ上森垣内ノ坪遺跡のⅠ区西半部にも埋没旧河道が分布し、Ⅰ区東半部からⅡ区にかけては埋没旧中州上に位置する。旧中州は扇状地の形成期につくられたもので、ついでこれが埋没する過程で辻川の流路がⅠ区西半部に形成された。その後Ⅰ区の埋没旧河道上では、目立った人間生活がみられなかったのに対して、高燥な環境であるⅡ区の埋没旧中州上では、７世紀末～８世紀に掘立柱建物、13世紀に総柱建物が建てられた。さらに、その後の13世紀以降に宮ノ前向井遺跡や井ノ上森垣内ノ坪遺跡の立地する地形面が段丘化したと考えられる。小中追谷口遺跡、宮ノ前向井遺跡、ならびに井ノ上森垣内ノ坪遺跡では、以上のような地形環境、およびそれと人間生活の関係が認められるのである。

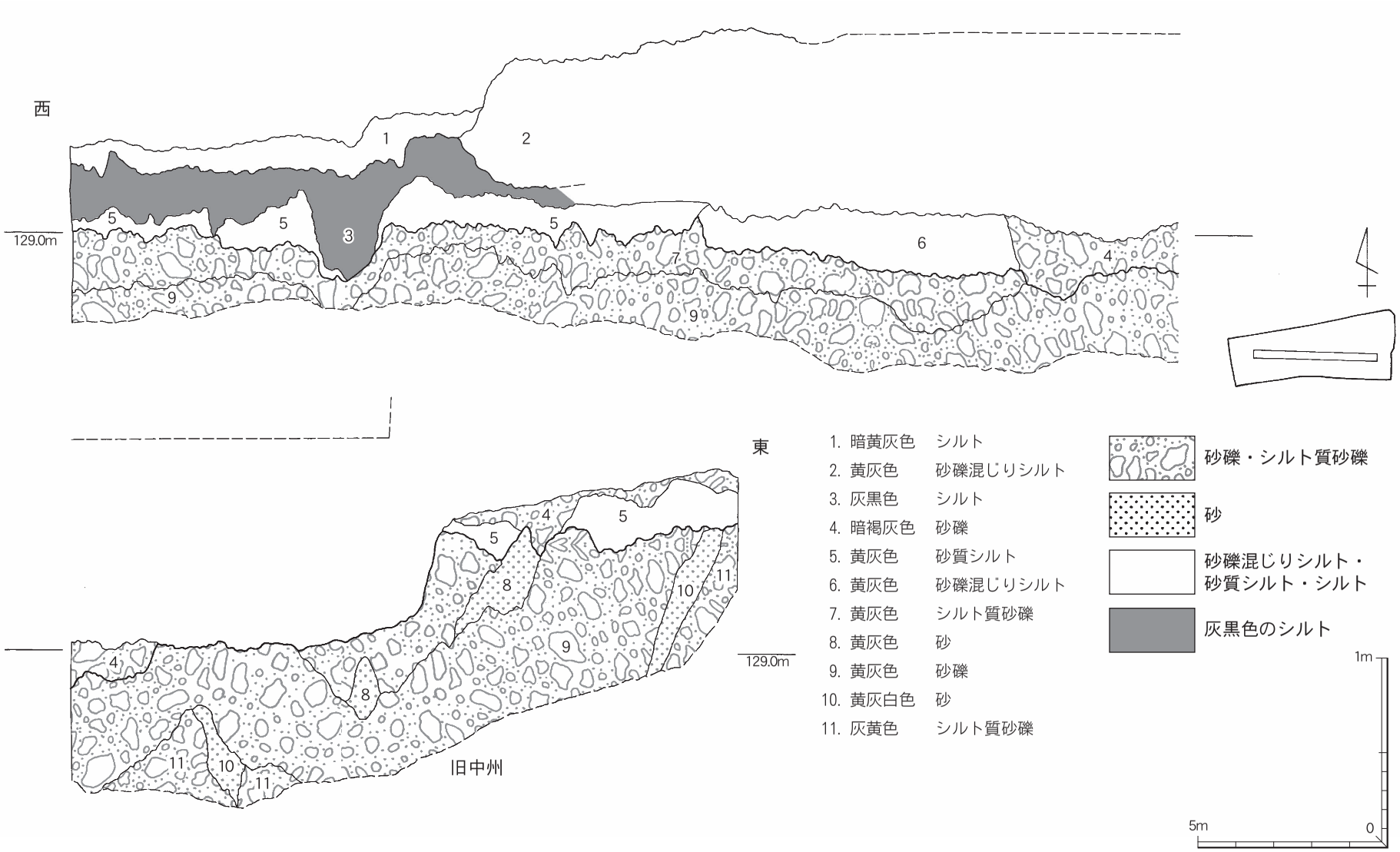
注

１）この放射性炭素年代測定はパリノ・サーヴェイ㈱と㈱地球科学研究所を通じてアメリカ合衆国のベータ社が行ったものである。

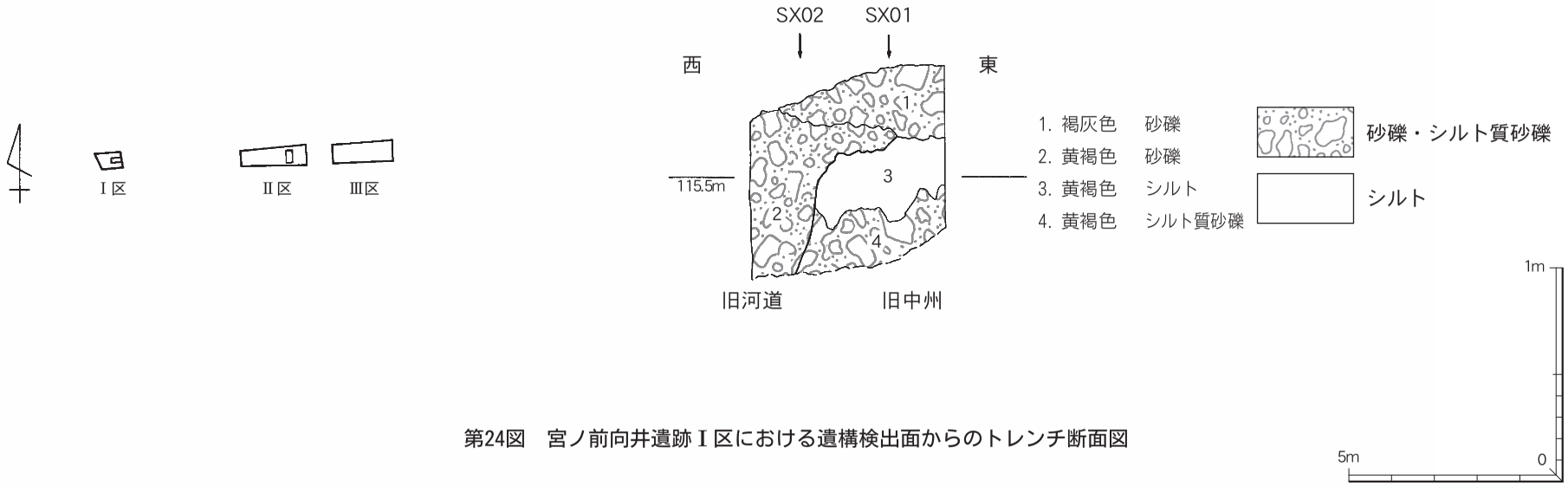
２）宮ノ前向井遺跡Ⅱ区では、地下水位が高く、激しい湧水の危険性があったため、扇状地を構成する堆積物の深さまでトレンチを掘削できなかった。



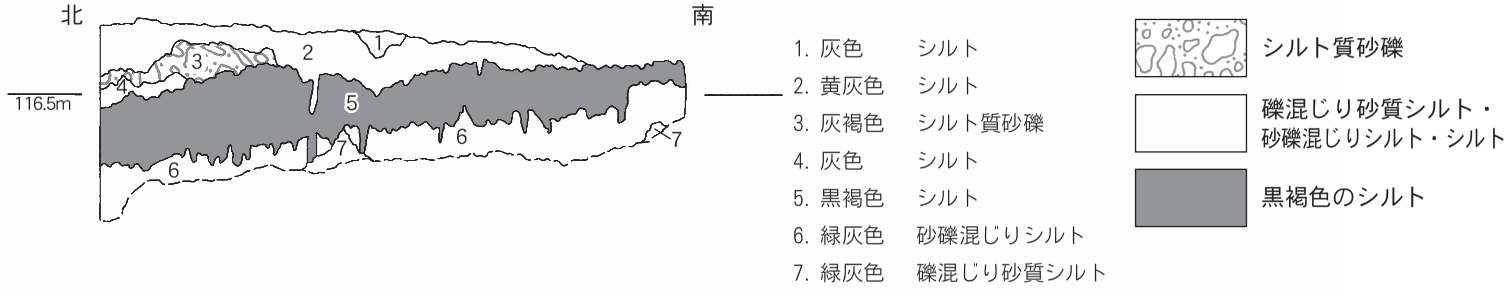
第22図　調査区周辺の地形分類図



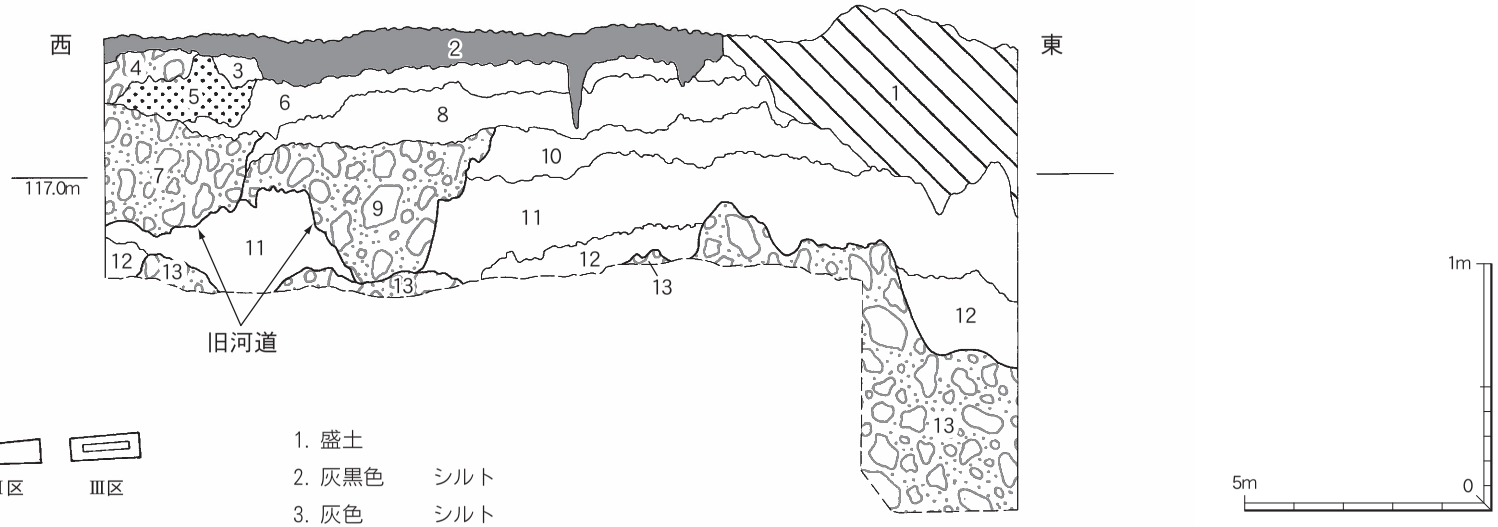
第23図　小中追谷口遺跡における遺構検出面からのトレンチ断面図



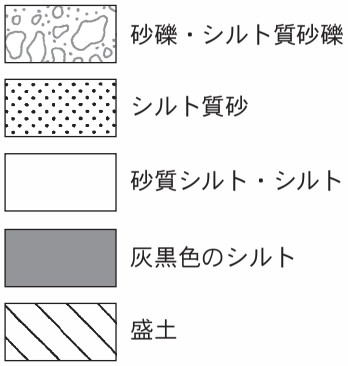
第24図　宮ノ前向井遺跡Ⅰ区における遺構検出面からのトレンチ断面図



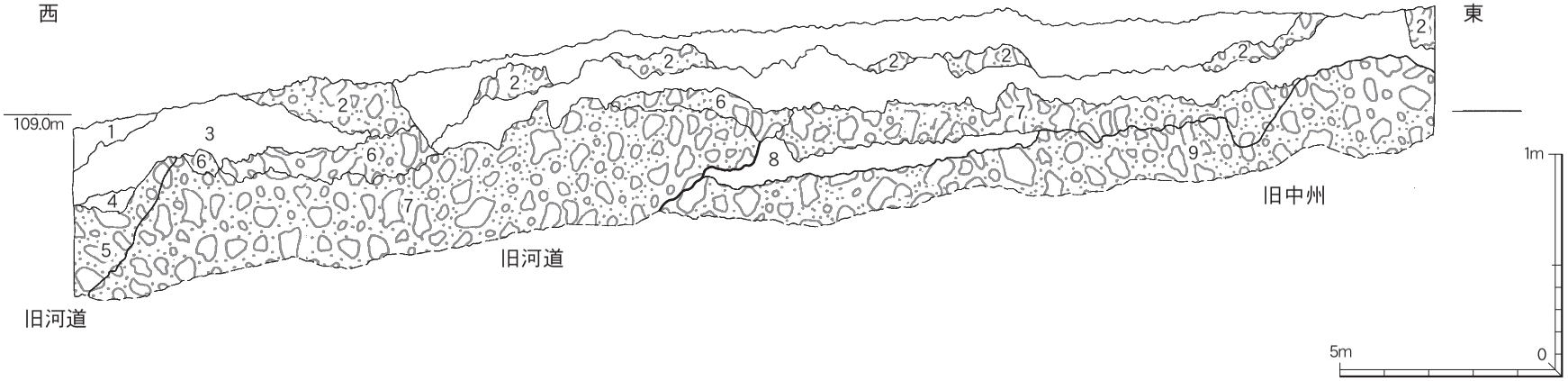
第25図　宮ノ前向井遺跡Ⅱ区における遺構検出面からのトレンチ断面図

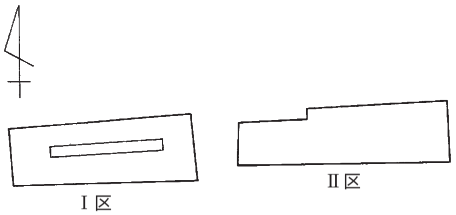


1. 盛土
2. 灰黒色　シルト
3. 灰色　シルト
4. 黄灰色　シルト質砂礫
5. 灰色　シルト質砂
6. 黄褐色　シルト
7. 灰色　砂礫
8. 褐色　シルト
9. 灰色　砂礫
10. 黄褐色　シルト
11. 灰黄色　砂質シルト
12. 黄灰白色　シルト
13. 黄灰色　砂礫

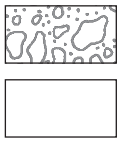


第26図　宮ノ前向井遺跡Ⅲ区における遺構検出面からのトレンチ断面図



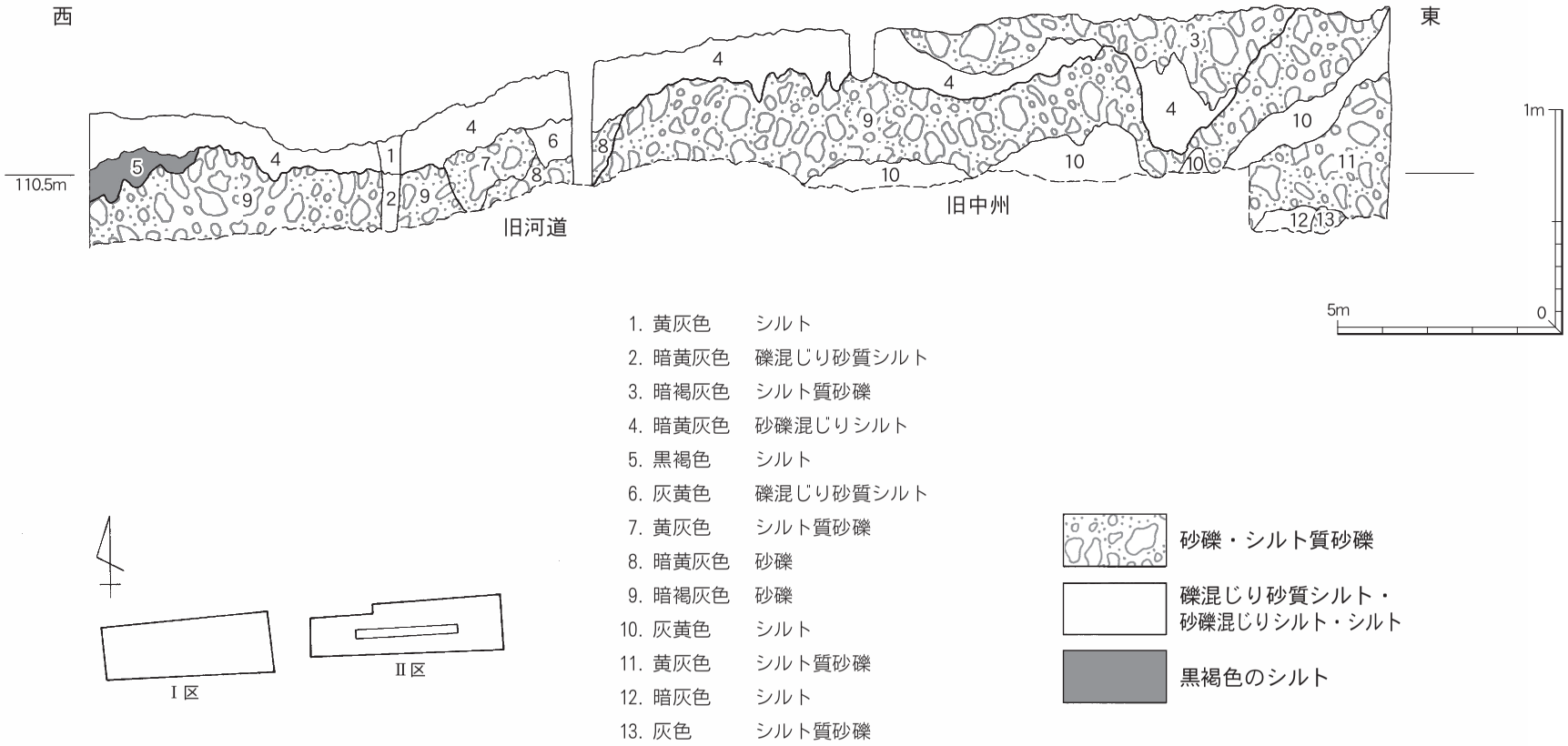


1. 黄灰色　シルト
2. 黄灰色　シルト質砂礫
3. 黄褐色　シルト
4. 暗褐灰色　砂礫混じりシルト
5. 暗褐灰色　シルト質砂礫
6. 暗褐灰色　シルト質砂礫
7. 灰黄色　シルト質砂礫
8. 黄灰色　シルト
9. 黄灰色　砂礫


砂礫・シルト質砂礫

砂礫混じりシルト・シルト

第27図　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅰ区における遺構検出面からのトレンチ断面図



第28図　井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区における遺構検出面からのトレンチ断面図

Ⅱ　宮ノ前向井遺跡から出土した木材・種実遺体の年代

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

宮ノ前向井遺跡は、篠山川支流の辻川左岸（南岸）に位置する。地形的には遺跡南部の山地河川により形成された扇状地上に位置し、辻川によって段丘化している。今回の試掘調査では、トレンチ１内から、土坑が検出された。土坑は、直径70～80cmのほぼ円形を呈し、深さは40cmほどあるが、上面は後世の洪水によって削平されている。土坑底部からは堅果類、土坑上面からはミカン割材が出土している。これらの検出状況から、土坑は縄文時代のドングリ貯蔵施設の可能性があるが、周辺には縄文時代の遺跡は知られていない。

そこで、今回の分析調査では、土坑から出土した堅果類および木材の放射性炭素年代測定を行い、土坑の構築年代に関する情報を得る。

１．試料

試料は、トレンチ18内から検出された土坑底部の灰色シルト混じり中砂から出土した堅果類の種子表皮（資料１：完形６点・破片２点）と、土坑上面の黒色シルト層から出土したミカン割材１点（資料２）である。なお、各試料については年代測定前に種類同定も合わせてを行う。

２．方法

試料は年代測定前に種類同定を行う。種実試料は双眼実態顕微鏡下で観察し、木材試料は剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入したプレパラートを生物顕微鏡下で観察し、種類同定を行う。同定後の試料は、放射性炭素年代測定の前処理として、測定対象となる物質以外のものを蒸留水で洗浄する。次に二次的に混入した有機物を取り除くために、酸／アルカリ／酸洗浄処理を行った後、加速器質量分析（AMS）法により測定する。なお、年代測定はアメリカ合衆国ベータ社の協力を得た。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma；68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M.Stuiver and P.J.Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することである。植物遺体を対象としていることから、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差σ、２σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、２σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、２σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

第４表　放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料名 種類・部位	測定値 BP	δ13C／12C (‰)	補正年代 BP	暦年較正年代（cal）				Code No.
				誤差	cal AD／BC	cal BP	相対比	
①堅果類 アカガシ 亜属果実	2530±40	－28.1	2480±40	σ	cal BC 757-cal BC 703 cal BC 696-cal BC 684 cal BC 669-cal BC 538	cal BP 2,706-2,652 cal BP 2,645-2,633 cal BP 2,618-2,487	0.267 0.060 0.673	Beta- 158177
				2σ	cal BC 770-cal BC 484 cal BC 465-cal BC 416	cal BP 2,719-2,433 cal BP 2,414-2,365	0.918 0.082	
②ミカン割材 アカガシ 亜属材	2500±40	－27.8	2450±40	σ	cal BC 746-cal BC 688 cal BC 664-cal BC 646 cal BC 552-cal BC 480 cal BC 469-cal BC 414	cal BP 2,695-2,637 cal BP 2,613-2,595 cal BP 2,501-2,429 cal BP 2,418-2,363	0.299 0.094 0.357 0.250	Beta- 158176
				2σ	cal BC 756-cal BC 684 cal BC 669-cal BC 607 cal BC 602-cal BC 409	cal BP 2,705-2,633 cal BP 2,618-2,556 cal BP 2,551-2,358	0.242 0.160 0.598	

1）測定年代は、1950年を基点とした年数。放射性炭素の半減期は、5568年を使用した。
2）補正年代は、δ13C／12Cの値を基に同位体効果の補正を行った年数。
3）測定年代・補正年代に付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
5）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986－2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用した。
4）暦年較正年代の誤差は、統計的に真の値が入る確率がσの場合68%、2σの場合95%である。
5）相対比は、σ、2σのそれぞれを１とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

３．結果

放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果を表１に示す。土坑底部の種実遺体の補正年代は2480±40 BP、測定誤差をσとして計算させた暦年較正結果はcal BC 757-538年を示す。土坑上部のミカン割材の補正年代は2450±40BP、測定誤差をσとして計算させた暦年較正結果はcalBC746-414年を示す。なお、堅果類および木材は、以下に示す解剖学的特徴から、いずれも常緑広葉樹のアカガシ亜属（*Quercus subgen. cyclobalanopsis*）に同定された。

木材：放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高のものと複合放射組織とがある。木材は、重硬で強度が高い材質を有する。（平井，1979）

堅果類：果実の長さは1.5cm程度。保存は悪く、先端部が残存している堅果は少ない。先端部は突出し、輪状紋が確認されるが、かなり摩耗が進んでいる。また表面は縦の条線がある。表面は薄くて堅く、光沢がある。

土坑（SX01）出土堅果種子

４．考察

今回調査を行った土坑底部の種実遺体と土坑上部のミカン割材は、いずれも常緑広葉樹のアカガシ亜属に同定された。放射性炭素年代測定値は、上記したように誤差範囲内で一致する値を示しており、暦年代で紀元前８～５世紀頃を示している。

近年、国立歴史民族博物館を中心とした弥生時代の開始年代に関する調査研究に伴い、縄文時代晩期～弥生時代の土器付着物に関する年代値が多数蓄積されてきている（西本編，2006・2007）。兵庫県下では、伊丹市口酒井遺跡で縄文時代晩期の口酒井式土器が2610±40BP（cal BC 845-750年）から2530±30BP（cal BC 650-540年）、神戸市戎町遺跡の弥生時代前期（Ⅰ期新段階）の土器が2395±40BP（cal BC 555-390年）、神戸市本山遺跡の弥生時代前期（Ⅰ期古段階）の土器が2470±40BP（cal BC 670-480年）から2510±40BP（cal BC 795-510年）、尼崎市東武庫遺跡の弥生時代前期（畿内Ⅰ様式（新）～第Ⅱ様式）の土器が2540±30BP（cal BC 795-735年）、などの年代値が得られている。春成（2007）は、これら兵庫県を含む、近畿地方の年代測定結果を整理し、較正年代で、口酒井式土器が前９～前８世紀、長原式が前８～５世紀の間のある期間、河内最古の遠賀川式土器が前８～前５世紀の間のある期間を占めていることなどから、遠賀川式土器と長原式土器との共存は弥生時代前期の古・中段階を主に、一部は新段階までつづくこと、両者が共存した長原式の下限の年代は前５世紀と推定されている。

以上のことを踏まえると、今回の年代測定を行った貯蔵穴の可能性がある土坑は、縄文時代晩期後半から弥生時代前期前半にかけて埋没したことが推定される。

なお、今回の土坑から出土した堅果類はアカガシ亜属の果実であったが、種の同定に重要な先端部の遺存状態が悪く、種の特定に至らなかった。アカガシ亜属の果実は、国内に生育する種類ではイチイガシ以外はアク抜きが必要である。時期は異なるが、神戸市本庄町遺跡で検出されている縄文時代後期初頭の堅果類の貯蔵を目的とした土坑では、アカガシ亜属（イチイガシ・アカガシ・シラカシ）が多くを占め、他にクヌギ、スダジイ、クリ等のブナ科、針葉樹のカヤ、常緑広葉樹のクスノキ、ツバキ等が少数出土しており、アク抜きの作業を必要とせず、簡便に食用にできるイチイガシを主に採集・貯蔵していたことが確認されている（渡辺，1991）。今回の土坑におけるアカガシ亜属の果実利用状況は不明であるが、出土した木材もアカガシ亜属であったことから、当時の人間によってアカガシ亜属が多用されていたことが示唆される。

引用文献

春成　秀爾　2007　近畿における弥生時代の開始年代.「新弥生時代のはじまり」第２巻　縄文時代から弥生時代へ，西本　豊弘 編　雄山閣　P20-34.

平井　信二　1979　木の事典　第２巻．かなえ書房.

西本　豊弘 編　2006 「新弥生時代のはじまり」第１巻　弥生時代の新年代．雄山閣，P143

西本　豊弘 編　2007 「新弥生時代のはじまり」第２巻　縄文時代から弥生時代へ，雄山閣，P185

渡辺　　誠　1991　神戸市本庄町遺跡出土の植物遺体．兵庫県文化財調査報告第92冊「－郵政省宿舎建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－　本庄町遺跡」，P62-65，兵庫県教育委員会.

報告書抄録

ふりがな	いのうえもりかいちのつぼいせき・みやのまえむかいいせき・こなかおいだにぐちいせき
書　　名	井ノ上森垣内ノ坪遺跡・宮ノ前向井遺跡・小中追谷口遺跡
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第368冊
編著者名	森内　秀造／青木　哲哉／パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	兵庫県立考古博物館
所　在　地	〒675－0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号　　TEL　079－437－5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所　在　地	〒650－8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号　　TEL　078－341－7711
発行年月日	2010年(平成22年)３月20日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
井ノ上森垣内ノ坪遺跡	篠山市上宿字屋敷ノ坪、井ノ上字森垣内ノ坪	28221	2002084	35度06分41秒	135度29分17秒	平成14年5月21日～平成14年8月6日	1,531㎡	一般国道372号日置バイパス道路改築事業
宮ノ前向井遺跡	篠山市宮ノ前字向井、字森ウ田	28221	2002083	35度31分46秒	135度29分22秒	平成14年5月21日～平成14年8月6日	2,000㎡	一般国道372号日置バイパス道路改築事業
小中追谷口遺跡	篠山市小中字追谷口	28221	2002085	35度31分46秒	135度30分47秒	平成14年5月21日～平成14年8月6日	950㎡	一般国道372号日置バイパス道路改築事業

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物
井ノ上森垣内ノ坪遺跡	集落址	飛鳥～平安時代初め	掘立柱建物群	須恵器・土師器・瓦器
宮ノ前向井遺跡	集落址	縄文時代晩期～弥生時代前期	貯蔵穴	縄文～弥生時代前期土器・石器・堅果種子
小中追谷口遺跡	集落址	鎌倉時代	掘立柱建物	瓦器

要　　約	日置バイパス建設に伴って３遺跡の発掘調査を実施した。井ノ上森垣内ノ坪遺跡は７世紀後半から13世紀前半にかけての集落遺跡で、掘建柱建物４棟が発見されている。宮ノ前向井遺跡は縄文時代晩期もしくは弥生時代前期の遺跡で、ドングリを包含した土坑２基が発見されている。ドングリは2480±40年BPの年代測定値の結果が出されている。小中追谷口遺跡は鎌倉時代前半期頃の集落遺跡で、掘建柱建物１棟が発見されている。

写 真 図 版

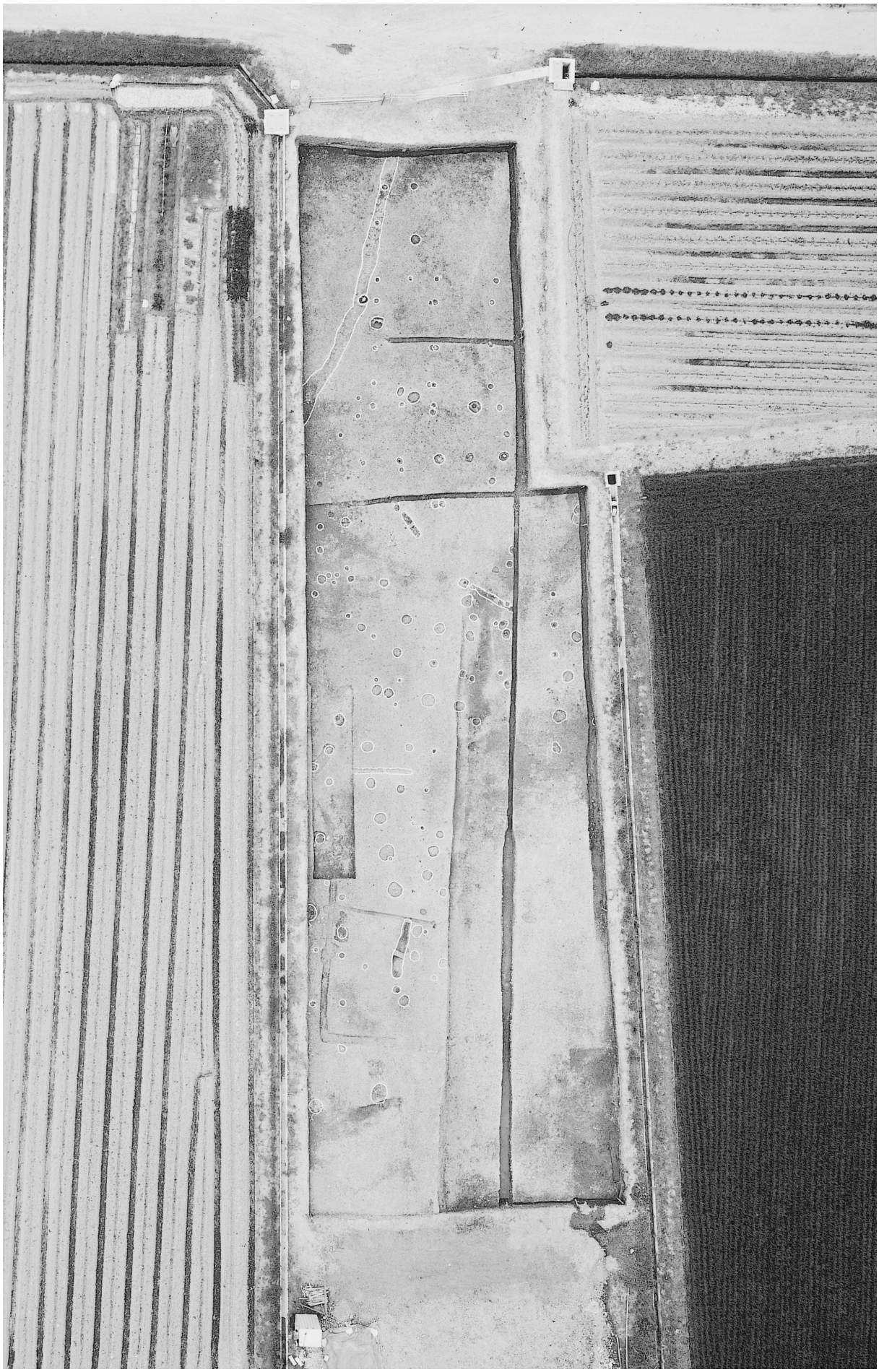
航空写真

a　遺跡群遠景（西から）
（A.宮ノ前向井遺跡　B.井ノ上森垣内ノ坪遺跡）

b　遺跡群遠景（北西から）
（A.宮ノ前向井遺跡　B.井ノ上森垣内ノ坪遺跡）

図版 2

井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区



全景（俯瞰）

井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区

a　全景（西から）

b　全景（東から）

井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区

a　SK01土器出土状況（東から）

b　SK02土器出土状況（西から）

井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区

a　SB01 a・b（西から）

b　SB02（南から）

c　SB02（東から）

井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区

SB01 a・b柱穴断ち割り断面１

a　SP01

b　SP02

c　SP03

d　SP04

e　SP09・SP14

f　SP10

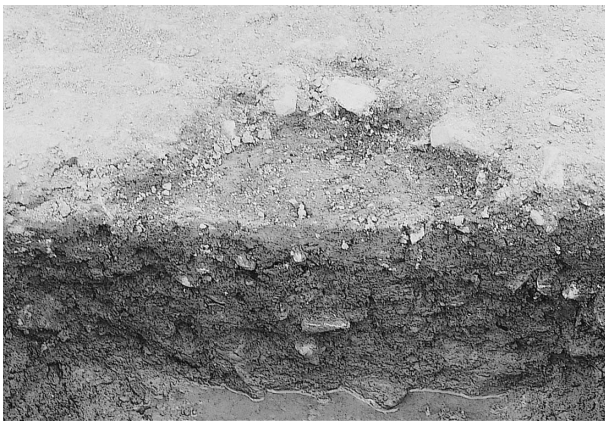
g　SP11

h　SP12

井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区

SB01 a・b柱穴断ち割り断面 2

a　SP 8 ・SP15



b　SP16

c　SP17

d　SP18

SB03柱穴断ち割り断面

e　SP28

f　SP30

g　SP29（南から）

h　SP29完掘後（南から）

井ノ上森垣内ノ坪遺跡Ⅱ区

SB02柱穴断ち割り断面

a　SP19

b　SP21

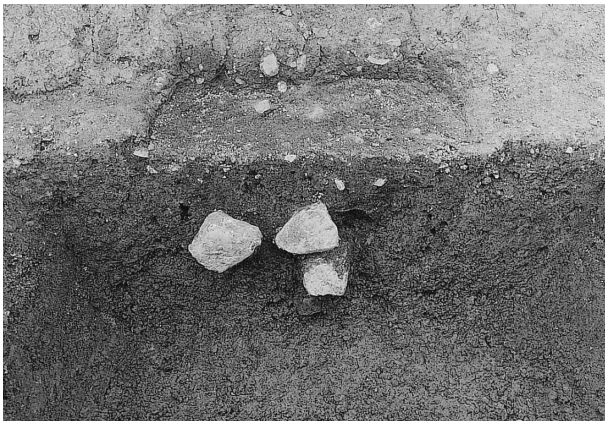
c　SP22

d　SP23

e　SP24

f　SP25

g　SP26



h　SP27

宮ノ前向井遺跡

a　SX01・02（南から）

b　SX01（南から）

c　SX02（南から）

小中追谷口遺跡

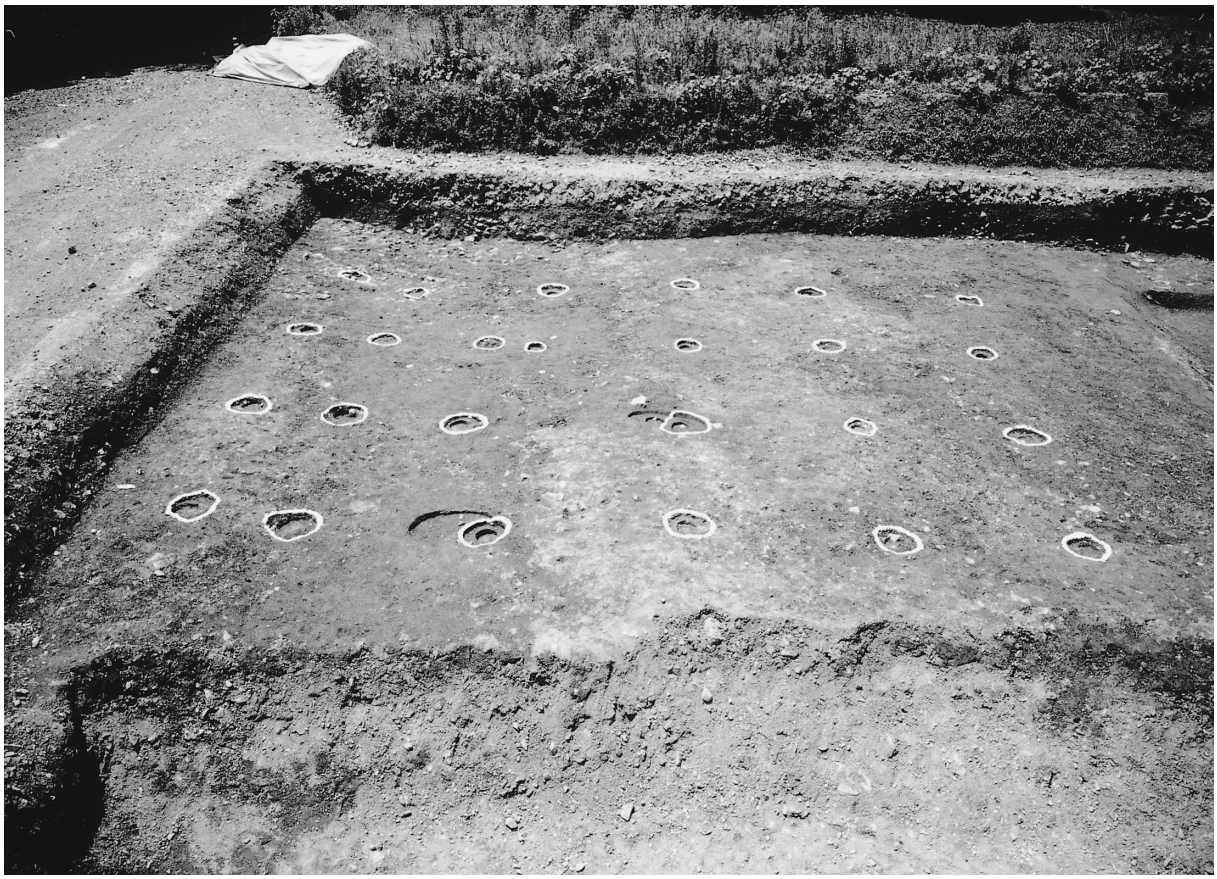
全景（俯瞰）

小中追谷口遺跡

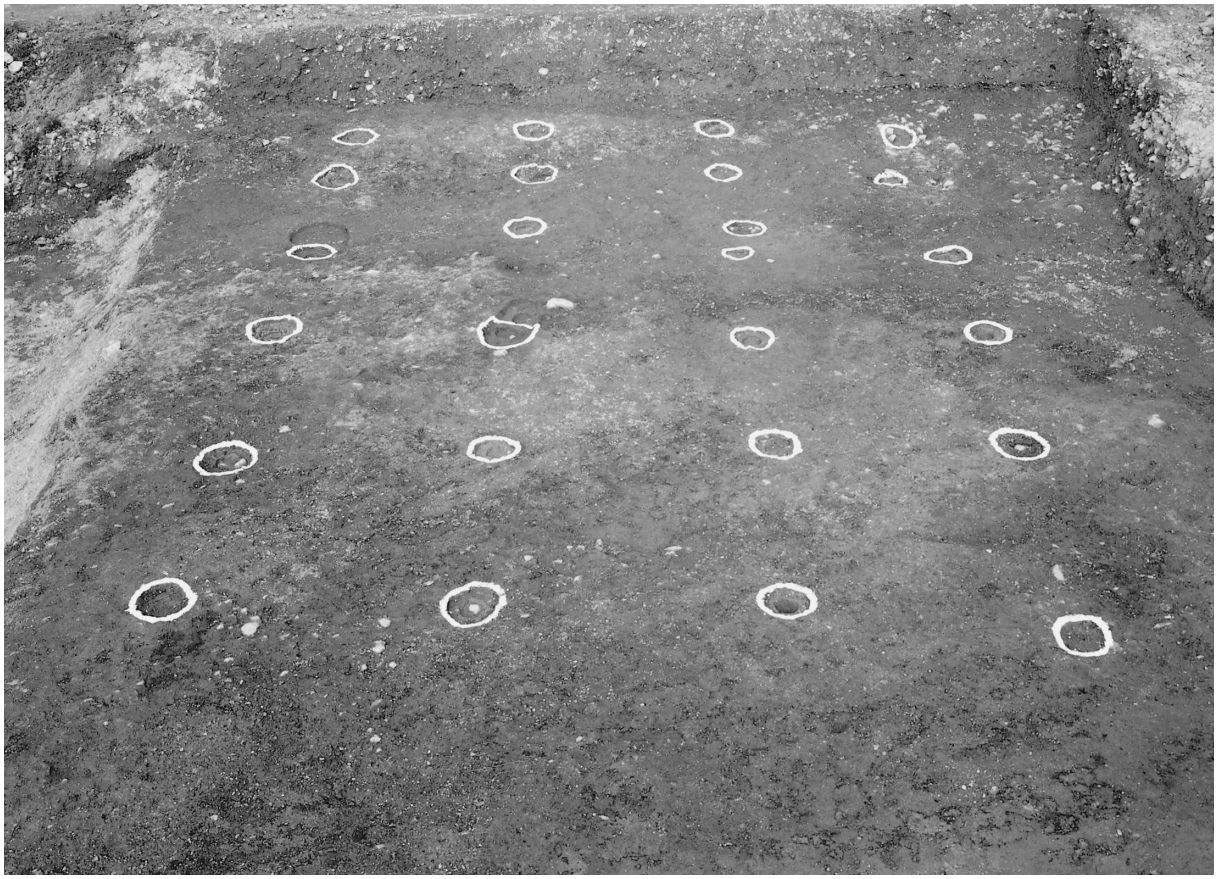
a　全景（西から）

b　全景（東から）

小中追谷口遺跡



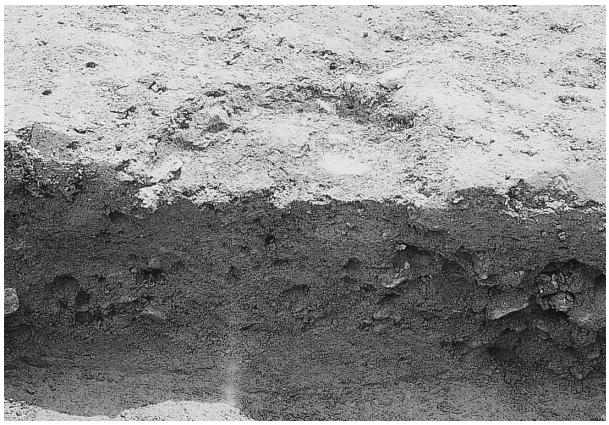
a　SB01（北から）



b　SB01（西から）

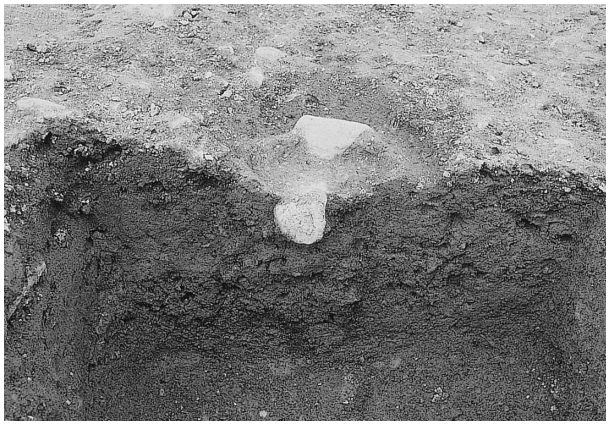
小中追谷口遺跡

SB01柱穴断ち割り断面



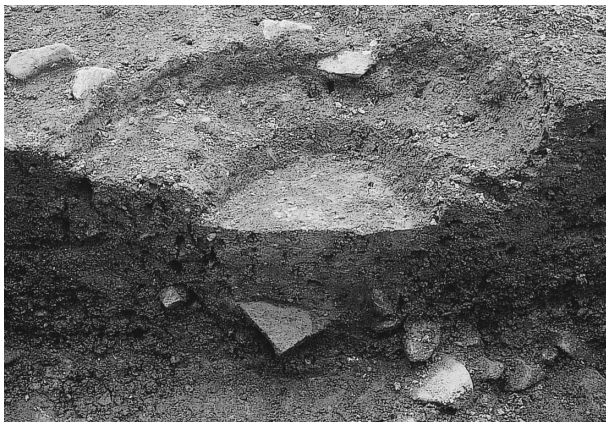
a　SP01

b　SP02



c　SP08

d　SP12



e　SP16

f　SP20

g　SP21

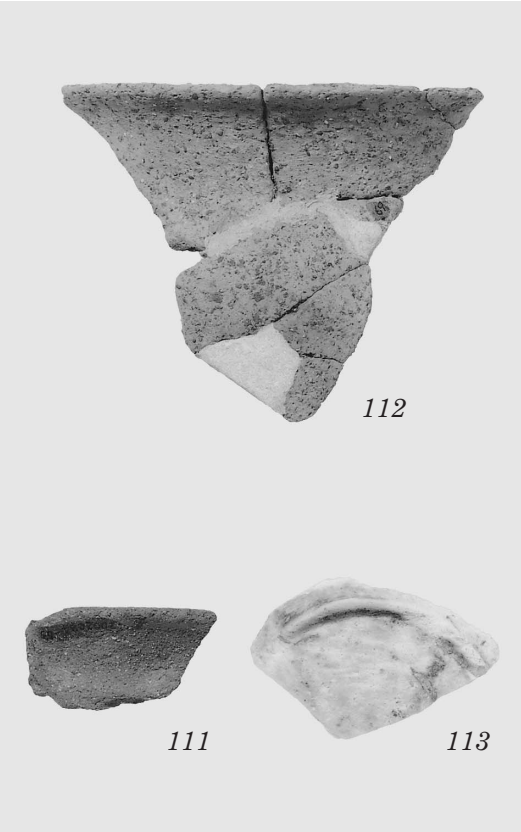
h　SP24

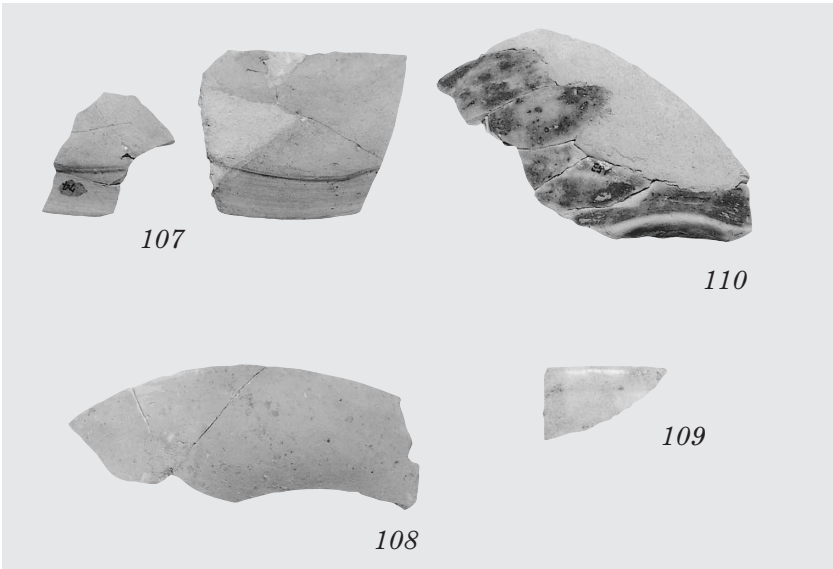
井ノ上森垣内ノ坪遺跡出土遺物

101

102

103

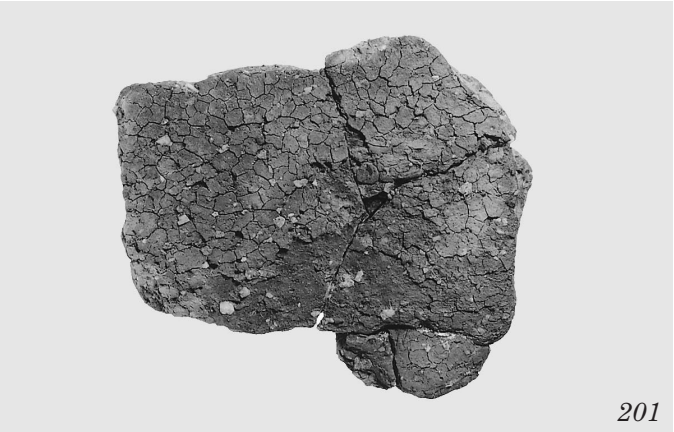

112
111
113


107
110
109
108

105

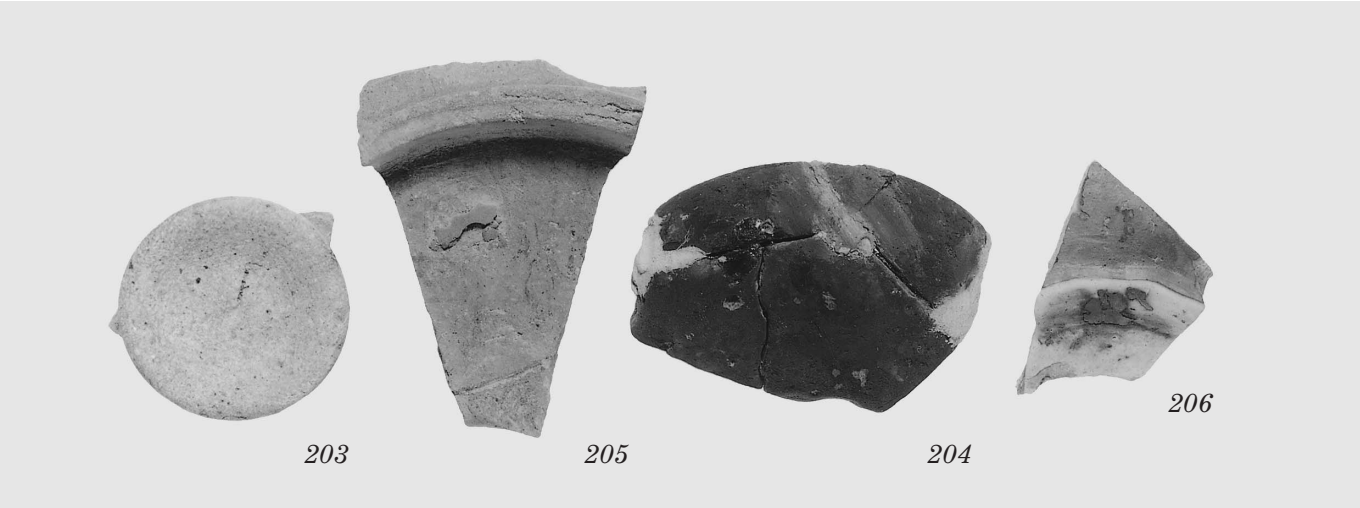
106

宮ノ前向井遺跡出土遺物



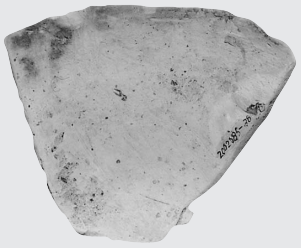
201

202

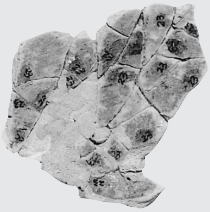


203 205 204 206

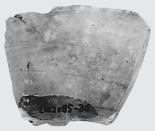
小中追谷口遺跡出土遺物



301



302

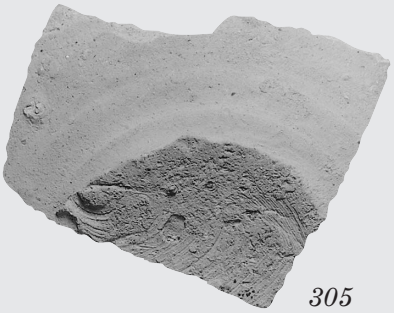


303

306

307

308



305

309

310

311

316

315

317

314

318

兵庫県文化財調査報告 第368冊

井ノ上森垣内ノ坪遺跡
宮ノ前向井遺跡　小中追谷口遺跡

平成22(2010)年３月20日発行

編　　集　　兵庫県立考古博物館
〒675－0142　加古郡播磨町大中１丁目１番１号
TEL 079－437－5589

発　　行　　兵庫県教育委員会
〒650－8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号
TEL 079－341－7711

印　　刷　　株式会社ソーエイ
〒673－0898　明石市樽屋町６－６